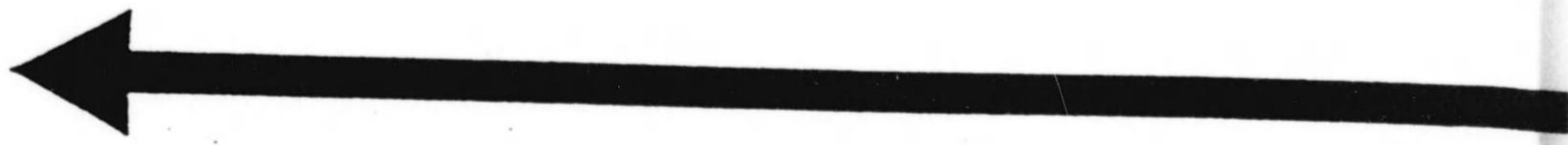




始



持233
620



日本の女

中村武羅夫篇

（新作大衆小説
全集第三十七卷）



非凡閣版

目次

日本の女……………一

故郷の唄……………二四

恩を返す日……………三三



日
本
の
女

攫はれた女

眞夏の太陽の光りが、キラ／＼と眩しくあふれた下に、海は黒潮を湛へて、擴がつてゐた。

「土用波が来たッ。」

「危ない。」

「二三人の叫び聲がひゞいたと思ふと、つゞいてけたましく、

「波に攫はれた！」

「助けて——」

といふ聲が、地ひゞきして崩れかゝつて来る恐ろしい波の音の合間に、斷れぎれに聞えた。

ちやうど雄吉は、夕方からの烏賊釣り船を出す都合で、濱に出て来たところだつた。乾し

ておいた錨綱を丸めてみると、さういふ只ならぬ叫び聲が、突如として彼の鼓膜を搏つた。

見ると、山のやうな大波が、沖の方から次ぎから次ぎと、押し寄せて來てゐる。それが長者ヶ岬を曲がると、一層勢ひを加へたやうに、黒い壁でも突つ立てたやうな高さになつて、濱も人も一呑みと、のしかつて來る。そして眞白な泡を立てながら、どつとばかりに砕けると、波の穂先は海水浴小屋の床下まで這ひ寄つて來る。

女や、子供たちは、きやツきやと大騒ぎして、逃げ惑ふ。下駄や、浮袋や、ペンキ塗りのベンチや、ビーチ・パラソルなどが、引つくり返つたり、ぶか／＼と浮いて、波間に漂つたりしてゐる。

今年から電車が通じて、この七月の十日から、初めて開かれた海水浴場である。——ちやうど昨日から、小學校の暑中休暇になつたばかりのところ、まだ人出は、そんなに盛んな方ではなかつた。

「あつ！ あそこに——」

「早く！」

「助けて！」

若い男が二人に、若い女が一人。腰から下を波に浸して、手を取合ふやうにして佇ずんでゐる。いづれも色を失つて、血走つたやうな眼を波間にそゝいでゐるのだが、誰一人として率先して、哮り狂つてゐる海に躍り込んで行つて、助けようとする者はゐないのであつた。いづれも、都會の人々なのだらう。男も女も、白々とした皮膚をして、華奢な身體つきをして、派手な色彩の海水着を着たり、海水帽を被つたりしてゐる。

「どうしたんです？」

雄吉が飛んで行つて、息ぜはしく訊くと、三人とも必死に雄吉に取すがるやうにして、自分たちの友達である一人の女が、いつしよに泳いでゐて、今、突如として襲ひかゝつて來た土用波に攫はれたことを、我先にと口早に説明した。

「助けて！ どうぞ、助けて。」

異口同音に叫んで、皆な物狂ほしい視線が凝視してゐる波間に、雄吉も眼を向けると、そこに息の根も止まるやうな光景を、チラと見た。

ちよつと見たところは、一掴みほどのボロ布か、古綿のやうな感じにしか見えなかつたが、それは明らかに華やかな海水着を、身に纏ふた女に違ひなかつた。——まだ、生きてゐるのか、それとも既に死んでしまつたのか。くつたりとなつた身體が、さながら一握の芥か、塵埃屑のやうに波に揉まれて浮きつ沈みつしながら、次第々々に沖へくと揉まれつゝあるのが、雄吉の眼に附いた。

「あつ——」

と、思はず叫んだ瞬間には、雄吉は既に身に附けてゐた、たつた一枚のシャツを脱ぎ去つてゐた。日に焼けて眞黒に光つた全身を、赤禪を一つ締め込んだ切りの素つ裸になつてゐた。

その周圍に群がつてゐた人々が、アレよくと固唾を呑んでゐる中に、雄吉は電光のごと

く、頭上から崩れ落ちて来る波の山を眼がけて、身を躍らせてゐた。

病める父

風のない、蒸し暑い夜だつた。

「お父つさん。——どんな鹽梅だな？ 少しばかり遅くなつたが、今、薬を煮て上げるから。」

土間に入つて来ると、雄吉は肩にかついでゐた漁の道具をどさりと、土間におく間も悟かしさうにして、先づ奥に寝てゐる父に、やさしく聲をかけた。

出かける時に、ちゃんと蚊帳も吊り、夕飯の支度もして出かけるのが常だが、食後三時間に服む薬の用意をして行くのを、つい忘れた。そのことを、漁に出た後で気が附いて、とても氣になつてゐた。——父は、三年も前から半身不随で、寢床に就いたきりである。

「お、お歸り。——ご苦労さんだつたな。」

父は、先づ寢床の中から、劬はりの言葉をかけてから、

「薬は、もう先刻、服ませて貰つたよ。」

と、言つた。

父の半身不随は、腦溢血の發作から來てゐることだつた。初めの頃は失語症に罹つてゐたが、この頃では、少し舌が縫れる氣味があるくらゐのところ、口を利くには不自由がなかつた。

「誰が服ませてくれたんです？」

「夕方から、お美代が來てゐたんだよ。――掃除をしたり、いろいろ世話をしておいて、さつき歸つて行つた。お前が上つて來る時分には、もう一週來ると言つてゐたから、もう直き來るだらう。」

お美代といふのは、雄吉と許嫁の仲である。お美代の家は、この濱から六七丁ばかり山に入つたところにあつて、二人は幼馴染みであるばかりではない。小學校の時分には、いつし

よの級だつたし、且つ、家と家とは遠い親戚つゞきで、姓も同じく、三浦といふのである。

早婚の田舎のことだから、本來なら二人は、もう疾づくに結婚してゐなければならぬところだ。しかし雄吉は、父が發病した三年前までは、中學校にも通つてゐたし、それに雄吉の父は丈夫の間は小學校の校長さんだつたし、お美代の父は、もう長いこと村長の職を勤めてゐるくらゐだから、どちらも村では智識階級の人々である。二十歳前の早婚は、どちらも嫌つたし、雄吉は、兵役の方もあることだし、それに父が倒れて以來、急に家が没落してしまつた。中學校も三年の二期きりで、中途退學を餘儀なくされたやうな始末だし、今では漁師をして、一家の生計を、どうにか支へてゐるやうな有様である。

こんな場合に、結婚どころの沙汰ではないと思つてゐた。もう少しどうにかなつたら、勉強したいと志してゐた。それも斯ういふ境遇になつた以上、中學校の課程など、どうでもいいから、少しでも早く實際生活の上に役立つやうな勉強をして、早く一人前の人間として、社會に立ちたいといふのが、雄吉の念願だつた。仕事の方面は、漁師だつていゝし、船

乗りだつていゝし、またこの頃盛んな産業戦士とか、拓士とか、何でもいい。本来雄吉の志望は飛行家になることだつたが、父がこんな病氣になり、一家の生計が、こんな有様になつた以上、自分の志望にたいして、彼是と選り好みなどしてゐられる場合ではないと覺悟してゐた。

「雄吉。お前は今日、濱で波にさらはれたお嬢さんを、助けたんだといふぢやないか。」

父は、雄吉が釣道具の後片付けをすましたり、足を洗つて座敷に上るのを待ち兼ねるやうにしてゐるが、やうやく自分から言ひ出した。——いくら待つてゐても、雄吉の方からはそんなことなどなかつたことのやうに、あつても全きり忘れてしまつたやうに、言ひ出しさうにもしなかつたので。——

「助けたなんて……そんな大袈裟なことではないんです。」

雄吉は、べつに打ち消しはしなかつたけれども、羞含むやうに呟いたきりだつた。そして、蚊遣りをくすべるために、瀬戸の火鉢と、杉の生葉とを、縁側に持ち出した。

海の英雄

「雄吉さん。」

かすかに呼ばれて、やさしく肩先を掴んで揺すられたと思つたら、やうやく眼が醒めた。

——見るとお美代が、ニツコリ笑つて、立つてゐた。

「あゝ、美代ちゃんか。いつの間にか、眠つてしまつた。」

古びた机に向つて、本を擱げたと思ふと、十行とは讀まない中に、つい眠つてしまつたのだ。

「こんなことでは、いけないな。机に向つて居睡りなんかして……心がだらけてゐるんだ。」

雄吉は、自分で自分を叱りつけるやうに言つたが、お美代は、

「無理はないわ。眠いのが當り前よ。あなたのは、一人前の仕事をした上で、勉強しようとなさるんですもの。疲れて、居睡りするくらゐ當り前だわ。」

と、同情した。

しかし、そんなことでは雄吉のこころは、慰められるべくもなかつた。考へて見ると、こんなことをしてゐて、いつになつたら東京に出て、思ふやうに勉強が出来ることか。心細い限りだつた。

「今日ね、あなたが鈴木別荘のお嬢さんを助けたこと、この村で、とても評判だわ。海の英雄だなんて。」

お美代の小さい胸は、自分の愛人が人を救つたといふ素晴らしい評判に、喜び慄べてゐた。

「困つたね。あれくらゐのことを、そんなに大袈裟に、評判なんかにされたんぢや……却つて、きまりが悪いぢやないか。」

と言つて、本當にきまりがわるさうに、顔を赧くしてゐた。

「偉いわ。」

「止してくれよ。お美代ちゃんまで、そんなことを言ふのは。」

「いいぢやないの。——人命救助で、今に表彰されるんぢやないかつて。それから、鈴木さんて、東京で、とても有名な金持のお家なんですつてね。」

「そんなこと、僕が知るものか。」

雄吉は打つちやるやうに言つたが、いかにも不機嫌さうにして、その太く、濃い肩をひそめてゐた。

「だつて皆なさう言つてゐるわ。——だから雄吉さんは、素晴らしい出世の蔓を掴んだんだつて。」

「馬鹿な！」

「あつ、わたし、あなたに、大事なお話があつて來たの。」

美代は、急に思ひ出したやうに言つた。

「どんなこと？」

「お父つさんは、よく眠つてゐらつしやるやうね。」

「この頃は、とてもよく眠るんだ。」

「きつと、だん／＼快くなつてゆくよ。——こゝでいつまでも話し込んで、お父さんの眼を醒ますといけないから、ちよつと濱に出ませうよ。散歩しながら、話を聞いて頂くわ。」

お美代は、立上ると、先になつて、土間に降りた。

闇の岬にて

晝の間は、あんなにいい天気だつたのに、日が暮れると共に曇り出した。風もバツタリ風いで、波は物憂さうに鈍い音を立て、のたり／＼と蜿つてゐる。

「わたし、困つたことが出来てしまつたの。ほんとに困つたわ。」

二人は、暗い細道を傳つて、いつの間にか岬の端の方まで歩いて来てゐた。墨を流したやうな眞暗な空には、星の光り一つ瞬いてゐない。たゞ、はるか左斜めの遠くに、K燈臺の明

りが、夜をこめて小さく、明るくかゞいてゐるのが、たつた一つぼつちりと見えてゐる。

雄吉に、びつたりと寄り添ふやうにして歩いてゐたお美代は、その手頃な岩の一つに腰を降ろすと、かなしさうにつぶやいて、かすかに溜息を吐いた。

「何かあつたんですか？ どうして、そんなに困つてゐるんです？」

雄吉もいつの間にか、お美代の前に佇ずんでゐた。

「あなたは、冷淡だわ。」

怨ずるやうに言つて、じつと雄吉の顔に見入つた。だが、闇に馴れた眼にも、たゞ輪郭だけが仄かに、見えてゐるだけなのが、何か物足りなかつた。

「なぜ？」

「わたしが、こんなに苦しんでゐるのに、何にも知らん顔をして。」

「だから、どんなことがあるのか、聞かして下さい。」

「わたし、困つたことが出来てしまつたの……」

「どんなことが？」

「尤も、今になつて、初つたことぢやないんだけども。」

「結婚のこと？」

「ええ。」

「誰か、お美代ちゃんの家に来てゐるつて、本當？」

「本當だわ。」

「その人、お美代ちゃんを欲しいんだつていふぢやないか？」

「あら、知つてゐらつしやるの。」

「知つてゐるといふわけでもないんだけど……でも、今日、沖に出てゐて、船の中で人が話してゐたのを、ちよつと聞いたものだから。」

「ぢや、やつぱり知つてゐらつしやるぢやないの。知つてゐて雄吉さんは、平氣なんだもの。だから、わたし心ぼそくなつてしまふぢやないの。」

「だが、僕に、どうすることが出来るんです？」

と、絶望的に言つて、かすかに溜息を吐いた。

「わたしもね、なるべくならこんな厭なことを、雄吉さんには、聞かせたくないと思つてゐたの。」

「……………」

「お話ししたつて、雄吉さんに心配をかけるばかりで、どうにもならないことは、分つてゐるんですから」

「……………」

「でも、どうしてもお話ししないわけには、いかなくなつてしまつたの。だつて、もう直ぐ、わたしを東京に連れて行くといふことになつたのよ」

「いっ。」

「二三日の中。」

「それでお美代ちゃんは、やつぱり、いつしよに東京に行くの？」

「行きたくないから、困つてゐるんぢやないの。」

「さうですか。」

雄吉は頷づいたが、それきり、ふかく考へ込んでしまった。

「どうしたら、いいでせう？」

お美代は、今にも泣き出しさうに、もうオロ／＼聲だつた。

幸福の道

お美代の母は、生きぬ仲だつた。——お美代を生んだ實の母は、彼女が五つの歳に急性肺炎で、呆つ氣なく死んでしまつた。七つの時に今の母が來た。今度の母には、男の子が二人生れた。だからお美代には、母の違ふ小さな弟が、ふたりあるわけだつた。お美代は、その二人の弟を、とても可愛がつてゐるし、よく面倒を見てゐる。

母とは生きぬ仲だけれども、二人の間はとてもよく行つてゐる。本當の母子の仲だつて、こんなには行くまいと思はれるくらゐである。母もいい人だし、お美代も素直で、溫和しい性質の上に、ナカ／＼の親孝行者である。小學校の時にも操行は甲だつた。先生からも始終褒められてゐるが、今でもお美代の毎日の行ひを知つてゐる近所の人々は、一人としてお美代のことを褒めたり、感心したりしない者はない。もちろんお美代の母も、みんなからの褒められ者である。

お美代は、母が違ふなどいふことは、今まで考へて見たこともなかつたし、そんなことは一度だつて、思ひ浮べたことすらなかつた。

母には東京に、ひとりの姉がある。或る商家に片附いてゐるのが、十二三年前に良人に死別した。それからずつと後家を立て通して、稼業に勵む傍ら、たつた一人の男の子を育てたり、教育したりすることに、没頭して來た。

その男の子は俊夫といつて、今年二十六歳である。二年ばかり前に高商を卒業して、今は

會社員になつてゐる。その母は相變らず番頭相手に、良人の殘して行つた商賣の道をついで、今では良人の生きてゐた時分よりも、却つて盛大なくらゐである。——お美代に取つてはその伯母が、息子の俊夫を連れて二三日前からこの村に来て、二人して滞在してゐる。

それはいいのだが、伯母はお美代を息子の嫁に欲しいと望んでゐるのである。尤も、その話は、かなり前からあつたらしい。そして勿論、兩親とも賛成なのだが、今度伯母と従兄とがやつて来るまでは、お美代にはそんな話があることなど、ちつとも知らせなかつた。

とにかく、現在では如何にその實現が困難であるにしても、お美代と雄吉とは、許嫁の間である。それに二人の仲がいいことは、お美代の兩親にも、よく分つてゐて見れば、容易なことでは言ひ出せなかつたのだらう。

「わたしお母さんから、今度初めてその話を聞かされて、びつくりしたわ。——もちろん直ぐに斷つたけれども。あんまり酷いと思つて。」

途方に暮れたやうに溜息を吐くのは、斷つてもそれで、(おおさうか。)と、言はれないため

だらう。

「村も狭いものだな。その噂を、今夜の烏賊釣り舟の中で、もうしてゐるんだから。」

「ねえ。わたし、どうしたらいいでせう。」

「どうしたらいいかつて……僕にも、よく分らないけれども。」

「だから雄吉さんは、冷淡だといふのよ。」

「決して、冷淡なわけではないけれども、僕には今、結婚することなんか出来ないのだから、君の兩親が、その人のところへ片附けたいと思ふのは、當り前の話だと思ふ。そしてお美代ちゃんとしては、その従兄といふ人と結婚するのが、やつぱり幸福の道ぢやないかと思ふんだ。従兄とは言つても、血がつゞいてゐるわけぢやなしね。」

「まあ！ あなたまで！」

と、お美代は必死に叫ぶと、しばらくは後をつゞける言葉もないかのやうに、はげしく息を喘がせてゐた。

「あなたまで、そんなことを言つて！ 酷いわ／＼。わたし、あんな人のところになんか、お嫁に行かないから！ ええ、死んだつて行くものですか！ 雄吉さんよりほかの人のところに行つたつて、どうしてそれが幸福なものですか！」

一氣に言ふと、忽ち咽び泣いてしまつた。

雄吉は、どう言つたらいいか、分らなかつた。慙ひこんなに興奮してゐる時に、何を言つたとして、仕方がないのだと思つた。——たゞ、こんなにまで自分のことを、一生懸命に思つてゐてくれる純真な乙女ごゝろが、うれしいやら、氣の毒なやら……でも、どうすることも出来なくて、たゞ呆然としてゐた。

「お美代さん。——お美代さんぢやないか。」

暗がりから、お美代の啜り泣きの聲を便りに、そつと忍び寄つて來ると、やさしく聲をかけたのは俊夫だつた。

百圓紙幣

翌日、雄吉が漁に出かけてゐる間に、鈴木別荘からは執事らしい使が來た。お嬢さんが助けて貰つたお禮だと言つて、麗々しく奉書に包んで、金銀の水引をかけたものを置いて歸つた。——奥さまからも、くれ／＼も宜しくといふ言傳だつた。

雄吉が歸つて來てから、その奉書包みを開いて見ると、大きな紙幣が一枚入つてゐた。それは百圓紙幣だつたが、雄吉は生れてからそんなものは、まだ一度だつて見たことがなかつた。

「お父つさん。こんなものが入つてゐるよ。」

と、雄吉は指先に摘んでヒラ／＼させて、父に見せた。

「あつ、百圓紙幣ぢやないか。」

父も、びつくりした。

「こんなものを貰ふはずはないから、返して来ようと思ふ。」

雄吉が無雑作に言ふと、父も賛成して、

「さうだ、その方がいい。そんな大金を、人さまから理由もなしに、貰ふわけにはいかないから。」

と言つて、頷いてゐた。

「では、すぐに返して来ます。」

雄吉は、氣輕に出て行つたと思ふと、やがて三十分もしたと思ふ頃には、急いで歸つて来た。

「どうだつた？」

父は心配してゐたやうに聞いたが、雄吉は何氣なく、

「一旦、上げたものだから、どうしても受取るわけには、いかないと言ふのを、いつまでも押問答をしてゐるのは、面倒くさかつたから、無理に押し付けて、どん／＼歸つて来てしま

つた。」と言つて、蟠まりもなく笑つてゐた。

「ふむ。」

と、父は考へてゐたが、

「それは、また押し返して、持つて来るかも知れないな。」

と、言つた。

「持つて来たつて、構はないさ。そしたら、また歸しに行くばかりだから。」

雄吉は、平氣だつた。そんなことには、いつまでも拘泥つてなどゐられないといふやうに、一分の時間も惜しむやうにして、机に向つてしまつた。

その夜は、それ切り何のこともなく、翌日 忘れたやうな時刻になつて、また鈴木別荘から、使が来た。

今度は、金の包みなど持つて来たのではなかつた。

「東京から、旦那さまもお見えになりましたし、どうぞ別荘まで、お出でをお願いいたしますま

す。」

といふ、甚だ殷勤な迎ひの使者だつた。雄吉の乗るために、人力車まで一臺餘計に、連れて來てゐた。

26

「これから、漁に出かけなければなりませんから。」

實際、漁に出かけなければならぬところだつたし、雄吉はキツぱり斷つてしまつた。

別荘からの迎ひ

雄吉が、沖に出漁してゐる間にも、鈴木別荘からは爺やや書生などが、代る／＼三度も使に來た。まだ、沖から歸らぬかと言ひ、歸つたら直ぐに來てくれるやうにといふ口上である。

「だから直ぐに行かないと、悪からうよ。」

老父は、息子が歸つて來た姿を見ると、まだ座敷に上りもしない中から、急かし立てた。

(どんな用事があるのだらう?)

とは思つたけれども、雄吉はべつに行つてはならない理由もなかつたし、行くまいとしてゐるわけではなかつた。たゞ、時間が餘り晩くもあるし、それに今夜は大漁で、かなり疲れをてゐた。

「明日の朝、行つたのではイケないでせうか?」

獨り言に呟いて、父に相談するやうに言ふと、

「それは一時も早く行かないと、悪いだらう。何しろお前の留守の間に、三度も迎ひの使ひが見えたのだからな。」

と、父は躍起になつて言つた。

「お父つさん。今日はお美代ちゃんは、來なかつたかえ?」

「お美代坊はどうしたのか。一度も來なかつたよ。」

父の返事を聞くと、雄吉は失望と共に、かすかな不安を感じずにはゐられなかつた。で

27

も、そんな氣持は色にも出さず、早速、着物を着換へると、

「では、行つてまいります。」

と、父に挨拶して、出かけて行つた。

すると、家を出てから、まだ一町と行かぬ中に、鈴木別荘から、また迎ひの使ひが来るのに、バツタリ出逢つた。

「お嬢さまが、お待ちかねです。」

といふ使ひの口上だつた。

雄吉の家から鈴木別荘に行くのには、ちやうど、お美代の家の前を通らなければならぬ。お美代の父は、この村の村長を勤めてゐる家柄だけあつて、築地に生垣をめぐらした廣い一構へだつた。

避暑地とは言つても、やうやくこゝ一二年こつちに開けた新開のことではあり、こんな田舎の海岸では、十時すぎの時刻と言へば、もう眞夜中も同じことである。どこの家も眞つ暗

になつて、ひつそりと静まり返つてゐたが、お美代の家も、同じことだつた。古風な冠木門は、ぴたりと鎖され、通りすがりによそながら覗いて見ると、手入れの行き届いた植木や、土藏の白壁などが、夜空の星明りに、ほのかに影のやうに見えてゐるだけだつた。

雄吉は、何がなし寂しさを感じたけれども、そんなことは氣振りにも現はさず、さつさと通りすぎた。

それが、どうだらう。一步鈴木別荘の門を入ると、電燈が明々について、洋館の窓といふ窓は、華やかにかゞやいてゐるし、蓄音機は浮きくするやうなメロデーで、タンゴか何かを奏してゐるではないか。

雄吉は、こんな時刻になつて、この別荘の附近に、今まで来たこともなかつたし、すっかり度膽を抜かれてしまつた。田舎の生活と、都會の人たちの生活とが、斯うも違ふものかと驚いた。そして都會の人々は、こんな邊鄙な田舎の海岸にまで、こんな華やかな都會生活の雰圍氣を持ち込んで来るのかと思ふと、驚くよりも寧ろ、何だか恐ろしいやうな氣がした。

玄關に近づいてゆくに從つて、それが單にレコードでジャズを奏してゐるだけではなく、五六人の若い男女が、手を組み、肩を抱き合ふやうにして、ジャズのリズムに合はせ、ステップを踏んでゐるのであつた。腕も肩もむき出しのやうな洋装である。

雄吉など、正視出来ないやうな氣がした。(これは、とんでもないところへ、来たものだ。)と思つた。——出来るものなら、このまゝ逃げ出してしまひたいと思つた。

女の部屋

雄吉は、自分呼んだのは、東京から来たといふ主人で、主人に會ふのだとばかり信じてゐた。

それが、導かれたのは媚めかしい女の部屋なので、意外な氣がした。いくらすゝめられても、素直には部屋の中まで入つて行けず、入口のところに佇んで、ためらつてゐた。——自分ながら「女の腐つたやう」に、意氣地がないと思つたが、しかしテレル神經を、どうす

ることも出来なかつた。

「どうぞ。」

これがあの時、自分が海で助けた令嬢だとは、全く咄嗟の場合のことで、よく見覚えもなかつた。それにあの時は、濡れた海水着だつたのが、今は服装だけでも、すっかり見違へるやうである。袖が長く、柄は派手に、色彩の美しい着物に、何といふ織物か、雄吉などは生れてからまだ一度も、見たこともない立派な帯を、きちんと締めてゐる。寝てこそゐないが、ベッドにフカ／＼した羽根枕を重ねて、半ば身を起すやうにして凭れてゐる。

「こんなところにお通しして、失禮ですけれども、どうぞお入り下さいませ。わたし、あれからずつと、起きられないで、斯うしてゐるものですから。」

令嬢は、いくか憔悴の見える、でも美しい笑顔を向けて、ためらつてゐる雄吉に重ねてすすめた。

「お疲れのところを、何度も／＼お使を出したりして……こんなに遅くなつてから来ていた

だいたりして、我儘ばかり申上げて、ほんとにすみません。さあ、どうぞ／＼お掛けになつて。」

やうやく、部屋に入つて来ることは來ても、固くなつて突つ立つてゐる雄吉に、令嬢は頻りに、そのイスをすゝめた。

「失禮します。」

と言つて雄吉は、やつぱり固くなつたまゝ、やうやく腰を降ろした。

「何とお禮を申上げたらしいのか：：ほんとにその言葉もありませんわ。あの時、あなたに助けて頂かなかつたら、わたし、今頃はどうなつてゐることかと思ふと、餘りの恐ろしさに、今でも身慄ひするくらゐでございますの。」

さう言ふ令嬢の言葉に、みじんも嘘や、偽りがあるとは思へなかつた。じつと雄吉を見つめてゐるその美しい眼は、薄く涙ぐんですられた。

「いや、あんなことは、何でもないことなんです。そんなに改まつて禮を言はれたりする

と、かへつて僕は、どうしたらいいか、わかりません。」

雄吉は心に、思つてゐるまゝを、卒直に言つた。

そのさつぱりした態度や、氣持が、餘計令嬢を感激させたらしかつた。

「まあ！」

と、こゝろから感嘆して、ふかい溜息を吐いたが、

「あなたは、何で立派な！ 美しい氣持を持つてゐらつしやるのでせう！」
令嬢のうるんだ双眸はかゞやき、呼吸は弾んだ。

「いや、どうも……」

と、雄吉はテレテ、顔を眞赤にすると、しどろもどろになつて、

「そんなことよりも……それで、わざわざ／＼お迎ひを幾度も下さつたのは、何かご用があるのでせうか？ どんなご用なんでせう？」
と、聞いた。

「用なんて……やつぱり、そのことですわ。わたし、自分で直接、しみじみとお禮を申上げた
いと思ひまして。本當なら、自分で伺ふところなんですけれども、まだ一日二日は、起きて
はイケないと、醫者から止められてゐるものですから。」
令嬢は、いかにもすまなさうに言つて、俯垂れた。

一生の目的

直接、自分がお禮を言ひたいから、そのために呼んだといふ令嬢の言葉は、雄吉をムツと
させた。べつにお禮なんか言はれたいと思つてゐるわけではないし、第一、自分の行ひを、
それほど大したことをしたとは思つてゐない雄吉としては、それくらゐのことにヤイ／＼言
つて、人を呼び附けたりして！と思ふと、自分の誇りが傷つけられた上に、相手の我儘
が、腹立たしかつた。

「さうですか。そんなことでしたか。——それなら僕は、これで失禮しますから。」

と言つて雄吉は、イスから起つた。

「あら！ 待つて下さい。」

思はず令嬢は、必死の聲を振り絞るやうにして呼んだ。

「まだ、何かご用が、あるんですか。」

「お怒りになつたの？」

「いゝえ。」

「お怒りになつたのでしたら、どうぞ許して下さい。」

令嬢に涙ぐんだりして、謝まれたりして見ると、雄吉は氣づよく、そのまゝ歸られな
つた。

「もう遅いですから。」

そんな曖昧なことを、つぶやいてしまつたが、でも、いつの間にか、さつきまで微かに聞
えてゐたレコードの音は止んで、四邊はひっそりしてゐた。

「ほんとに遅くなつて、すみません。でも、お手間は取らせませんから。」
「ですが、明日は早くから、漁に出かけなければなりませんから。」

「三浦さん。」

「はあ？」

「あなた明日から、もう漁になんか出かけることは止めて頂けないでせうか。」
「なぜです？」

「おねがひですわ。」

と言つて令嬢は、雄吉の前に、殊勝に頭を下げた。

突然、餘りに思ひがけないことを言ひ出されたので、雄吉はびつくりしてしまつた。しばしは言ひ出す言葉も忘れたやうにして、眼ばかりパチ／＼瞠つてゐたが、

「どうしてです？ どうして僕が漁に出るのを、止めなければならぬでせう？」
と、怒つたやうに聞いた。

「突然、こんなことを言ひ出したりして、お分りにならないのは、尤もですわ。」

「全く僕には、分りません。」

「わたしあなたを漁師なんかにしておきたくないんです。」

「えつ。」

「あなたゞつて、一生漁師になつて、こんな田舎に埋れてしまふのが、目的ではないでせう！」

「どうしてあなたは、そんなことを知つてゐるんです？」

雄吉は、たゞ呆れて、眼をパチくりするだけだつた。

「わたし、知つてゐますわ。それくらゐのことは、わたし、ちゃんと知つてゐますわ。」

令嬢は勝ち誇つたやうに、美しい双眸をかゞやかして言ふと、ニツコリした。

望みの勉強

令嬢の名は、幸江といった。彼女には本當の母がなく、今ゐるのは年齢も幸江と、そんなに違はないくらの若い義母であることも、話してゐるうちに、だん／＼分つて來た。そして華美な生活をしてゐる中にも、外見に似合はず彼女の氣持は、かなり寂しいことも、兄や、兄の友達や、いつしよに別荘に來てゐる親類の息子や、令嬢たちは、皆な浮き／＼した氣持で、華やかなその日／＼を送つてゐる中に、幸江だけは孤獨であることも、次第に分つた。それから、言ひ出し方は突飛に聞えたけれども、雄吉に助けられた恩を、こゝろから深く感じて、何とかしてお禮をしたいと思つてゐる眞面目な志や、雄吉の人柄や、平常の行ひなどについても、村の人たちから噂を聞いて、頼もしく思つてゐることも、ハツキリわかつた。——だから雄吉を、東京の屋敷に引取つて、自由に目的の勉強をさせてやらうといふのであつた。病氣の父も引取つて、どこか適當な病院に入れて、十分養生させてやるといふことだつた。

まるで、雄吉に取つては夢のやうな話だつた。

「ね、さうさせて下さらない？ さうすればあなたゞつて、いつまでも田舎に埋れてゐなくたつていいのよ。飛行機のことだつて何だつて、好きな勉強が出来るぢやないの。お父さまのことだつて、ちつとも心配しなくていいのよ。」

幸江は熱心に言つた。黒い瞳は涙にうるんで、美しくかゞやいて、双頬は仄かに紅潮してゐた。

餘りに思ひがけない——その上夢のやうな幸福な話に、雄吉は暫しの間は、何と返事をしなうたか、分らなかつた。

「……………」

無言のまゝ、眼を睜るやうにして、茫然としてゐた。

「それにね、本當は、わたしあなたに、お友達になつて頂きたいの。」

「僕にですか？」

雄吉は訝しさに、更に眼を睜つて、幸江の顔を眞正面に眺めた。

「え、さう！」

と、幸江は眞剣な表情をして、つよく頷いたが、

「だつてあたし、義母はわたしのために、眞身の相談相手になんかなつてくれないでせう。父は忙しいものですから、家庭にゐることなんか少ないし、わたしと口を利くことは、一ヶ月の中に一度か、二度くらいあるかなしなの。——兄でも少ししつかりしてゐてくれるといいですけれども、まるで浮き／＼したやうな日ばかり送つてゐるの。だから、わたしの力になつてくれる者なんか、一人もゐないの。」

と言つて、幸江はホロリとした。

「はあ。」

雄吉は、話を聞いてゐる中に、だん／＼幸江の立場に、同情を寄せるやうな氣持にならずにはゐられなかつた。

「ですからわたし、あなたにお友達になつて頂きたいの。しつかり勉強して、立派な人にな

つて、わたしの力にもなつて頂きたいと思ふの。」

「よく分かりました。」

「あら、それではわたしの言つてゐることを、承諾して下さるの！」

と言つて幸江は、眼も顔も、急にぱつとかゞやかした。

「はあ。友達になつて力になるといふことは承知しました。」

「では、東京の屋敷に来て、勉強して下さいませんか？」

「そのことは、どうもお断はりしなければならぬと思ひます。」

「どうして？」

幸江は失望したやうに、見る／＼悄然とした顔色になつて、不安さうに呼吸を喘がせてゐた。

「それは、理由なく他人の恩恵を受けることは、どうも僕の潔しとしないうところだからです。」

雄吉は、すこし固くなつて、きつぱり言ひ切つた。

立派な理由

「理由がなくはないわ。立派な理由が、ちやんとあるぢやないの！」

幸江は、すこし急ぎ込んで、吃り氣味に言つた。

「どんな理由があるでせう？」

雄吉は、落着いてゐた。

「わたしを助けて下さつたといふことが、立派な理由ぢやないの！ さう！ あれが本當に立派な理由だわ。傍にゐる人たちが、誰もすることが出来ないことを、あなたは遠くから飛んで来て、して下さつたのですもの。あの時あなたが助けて下さらなかつたら、今頃わたしは、どうなつてゐるか分らなかつたのよ。いゝえ！ ハッキリ分つてゐるわ。今頃わたしは、海の底の藻屑になつてゐたといふことが。——斯うしてわたしが生きてゐられるのは、

あなたのお蔭だわ！ あなたは、わたしの生命の恩人なのよ。どうかして、そのご恩に報いたいと思ふの。生命を助けられた大恩に報いるためには、どんなことだつて、しなければならぬと思ふわ。そしてあなたとしては、それを受けて下さるのが、當り前のことぢやないかしら。」

幸江は、ひどく熱し、ひどく興奮して、少し吃り／＼に、でも一生懸命になつて言つた。異常な情熱だつた。双の瞳は燃えるやうにかゞやいてゐたし、顔色は、いくらか蒼ざめて見えるけれども、朱をさしたやうな眞赤な唇が、電氣の光りの下に、とても鮮やかに、美しくかつた。

「僕は、あれくらゐのことを、そんなに大袈裟に考へて頂きたくないんです。何でもないことなんです。當り前のことをしたゞけなんです。それを生命を助けたとか、恩を受けたなどと言はれると、かへつて僕は、恥かしくなるんです。」

雄吉は、單に謙遜だけで、そんなことを言つてゐるわけではなかつた。大したことでもな

いと思つてゐるのに、餘り大袈裟に言はれるのが極りわるく、羞含むやうに顔を赧くしてゐた。

「まあ！」

幸江は感動して、眼を睜り、呼吸を弾ませてゐた。それと共によく雄吉の人柄が奥ゆかしくなり、頼もしくなり、愛慕に似た情熱が湧き上つて來ることが感じられた。

「ですから、そのために僕が、自分の思ふまゝの勉強をさせて頂くなつて、そんなご厚意を甘んじて受けるわけにはいかないんです。しかも病氣の父まで引取つて、入院させて貰つたりましたら、それこそ僕は、どうしたらいいか分かりません。あなたのお志は、有難いと思ひますが、しかし僕としてはそのお志に、甘えるわけにいきませんから。」

きつぱり斷つて、イスを起たうとすると、幸江は、

「待つて下さい。」

と、必死になつて言つた。

「ですが……僕はこれで、失禮しますから。」

無理に雄吉は、振切るやうにして、別れを告げて、入口の方へつか／＼と歩いて行つた。

ちやうど、そこへ一人の立派な紳士が、浴衣がけで入つて來ると、ぬつと立ちふさがるやうにして、雄吉の前に立つた。

「わしは、幸江の父ぢやがね、君の心掛けは立派なものだ。ほんたうに感心した。それで、わしからも話があるから、すまんが、もうちよつと待つてくれたまへ。こゝで話すか？ それとも、あつちの應接室の方へ、來てくれるかね。」

父の鈴木氏は、五十歳を過ぎた年配とは思へないやうな、若々しい顔をニコ／＼させて、手を上げて雄吉の肩先を抑へるやうにした。

「はあ。」

どうしたらいいのか、雄吉がマゴ／＼してゐると、

「どうぞ、もう一度こゝに、お掛けになつてね。」

と、幸江が言つて、さつきまで雄吉が腰掛けてゐたイスを示した。

父の容態

雄吉が、鈴木別荘を訪ねたあの夜から、父の容態が急變した。——夜更けて雄吉が歸つて見ると、父は寢床の上で、一人で苦しんでゐた。

すぐに村の醫者に來診を求めると、父は尿毒症を併發したのだといふ診斷だつた。だから雄吉は、片時も父の病床から離れるわけにはいかなかつた。たうとうその夜は徹夜して、父の看病に手を盡した。翌日になつても、豫定の漁などに出掛けるどころではなかつた。附き切りで、雄吉一人が看護の手を盡してゐるところへ、偶々お美代が、いつものやうに訪ねて來た。

「お父つさんが、こんなにお悪いのに、なぜ直ぐに、わたしに知らせてくれなかつたの！」と、お美代は掻き口説いた。

「わたし、もう家には歸らないわ。——お父つさんに付き切りで、看病して上げなければならぬから。」

さう言つてお美代は本當に、挺子でも動く氣色が見えなかつた。雄吉が、それでは小父さんや小母さんに悪いからと言つて、いくら歸るやうにすゝめても、家から代るゝに、いろんな人が迎ひに來ても、お美代は病人の枕許から、決して離れようとしなかつた。

たうとう終ひには、俊夫が自分で、わざわざ迎ひに來た。

俊夫は初め、

「ちよつと……」

と言つてお美代を、門口まで呼び出した。そこで暫らく二人は、何かゴテ／＼話してゐた。

何か、言ひ争ひでもするやうに、二人の烈しい聲が聞えてゐたが、間もなくお美代は、
「わたし、そんなことは知らないから、あなた一人で、いつでも好きな時に、東京に歸つた

8058

らしいぢやないの。」

と言ひ捨てたと思つたら、そのまゝ家の中に駆け込んでしまつた。そして、父の枕許に坐ると團扇を取つて、何も分らずにウツラ／＼としてゐる父に、しづかに風を送つた。

いくら俊夫が、

「お美代ちゃん／＼。」

と呼んでも、それからまた、

「頼むから、もう一度出て来てくれないか。まだ、話があるんだから。」

と、哀願するやうに言つても、決して動かうともしなかつた。

溫和しくて、やさしい氣質のお美代だつたけれども、一旦決心したとなると、とても強いところがあつた。

「それでは三浦君。君に、ちよつと来て貰はふか。」

俊夫は、たうとう業を煮やしたやうに、開き直つて雄吉を呼んだ。

お美代の幸福のために

「僕に、何か用ですか。」

雄吉は土間から出ると、俊夫と向ひ合つて言つた。——雄吉は今まで、べつに俊夫にたいして、何も恩怨はなかつたけれども、俊夫は雄吉にたいして、自分が都會人であるからか、それとも商大の卒業生だからといふ自負からか、いつも優越感を抱いてゐるやうに、傲然たる態度で臨んでゐた。雄吉は、敢てそれを氣にしてゐるわけではなかつたけれども、しかし面と向ふと、反撥するものを感じずにはゐられなかつた。

だから、どうしても雄吉の態度は、ぶつきらぼうになつた。

「君に、話があるんだ。——ちよつと、こつちに来てくれたまへ。」

俊夫は命令するやうに言ふと、もうすん／＼先に立つてゐた。

「僕は、あまり遠くへは、行かれないんですが。」

「そんなに遠くへゆくんぢやない。すぐ、そこだよ。」

俊夫が腮を突き出すやうにして示したのは、雄吉の家の門口から少し離れた、大きな樟の木の下だつた。

雄吉が、黙つてそこまで附いて行くと、俊夫は樟の木の最後まで、ゆつくり歩いて來たと思ふと、びつたりと立ちどまつて、

「君から一つ、お美代ちゃんに話して貰ひたいんだがね。」
と言つた。

「僕がお美代さんに、どんなことを話すんです？」

「僕といつしよに、東京に來るやうに、すゝめてほしいんだ。」

「それは駄目ですよ。」

「なぜ、駄目なんだ。」

「僕がすゝめても、お美代さんは、僕の言ふことなんか、素直にハイと言つて、聞くもんで

すか。」

「聞かないだらうか？」

「お美代さんには、お美代さん自身の考へがあるのですから。」

「しかし、お美代さんを引き留めてゐるのは、君だといふ話ぢやないか。」

それまでは強いて冷静に、自分を抑へてゐたらしいが、俊夫はだん／＼感情的になつて來て、詰問口調になつたと思ふと、唇を慄はせた。

「誤解ですな。」

雄吉は、微笑を含んで、しづかに言つた。

「何が誤解だ！ その通りぢやないか。」

「どうして、そんなことが斷言出来るんです？ 僕は、そんなことを言はれるのは、迷惑千萬です。」

「お美代ちゃんのお母さんだつて、僕の母だつて、皆なさう言つてゐるよ。——もちろん僕

だつて、その通りだと思つてゐるがね。若し君が、お美代ちゃんを無理に引き留めてゐるんでなかつたら、君からよくすゝめて、東京へ出て来るやうにするのが、當然ぢやないか。」

「それは、お美代さんのためになることだつたら、僕からも一應すゝめて見てもいいですがね……しかし、僕からすすめたところが、お美代さんの意志が、どう變るか分らないですね。」

「僕といつしよに東京に来ることが、お美代ちゃんの幸福なんだから。」

「本當に、さうすることが、お美代さんの幸福でせうか？」

「君は疑つて、ゐるのかね。」

「いえ。疑つてゐるわけではありませんが……」

「それなら、君からよくすゝめてくれたまへ。そしてお美代さんが、東京へ来るやうにしてくれたまへ。」

「それは、どうなるか分かりませんが……とにかく僕からも一應、すゝめて見ることにしませ

う。」

さう言つて雄吉は、とにかく俊夫には、一旦お美代の家まで歸つて、待つてゐてくれるやうにと言つたにもかかはらず、俊夫は頑固に、

「しかし僕は、この邊で待つてゐることにするから。」

と言つて、雄吉が、

「それなら。」

と、家に入つてゆくのを、俊夫は自分もまた、門口までノコノコ附いて来て、そこに佇ずんだまゝ動かなかつた。

そんな女だと

尿毒症が頭腦を冒したのだらう。父は、べつに苦しみもしなかつたが、既に意識は混濁して、ハッキリとは、誰が誰だか分らないらしかつた。枕許で、どんな話をしてゐても、人の

會話など、よく聞き取れないらしかった。

雄吉が内に入つて見ると、父は眠つてゐるのか、覺めてゐるのか分らなかつたが、お美代は先刻のまゝの同じ姿勢で、父の枕許に坐つてゐた。微動だもしてゐないところ、さながら石で、も刻まれた彫像のやうな感じだつたが、しかし、よく見ると、彫像でない證據には、手にしてゐる團扇が機械的に動いて、しづかに父の顔のあたりに、風を送つてゐるのであつた。

「あの人、雄吉さんに、どんな用事があつたの？」

と、お美代は雄吉が入つて行つて、しばらくしてから、父を憚かるやうに聲を低くして聞いた。

「自分といつしよにお美代さんも、東京に来るやうに、僕からよくすゝめてくれといふんです。」

雄吉も、自づと聲を低くしてゐた。

「まあ、呆れた。」

お美代は、吐き出すやうに言つて、眉をひそめたが、

「そんなことを、あなたに頼むなんて、何て圖う／＼しいんでせう。」

本當に腹立たしさに、舌打ちでもし兼ねない様子だつた。

だが、雄吉は、いよく眞面目な表情をして、

「お美代さん。」

と、改まつた調子で呼びかけた。するとお美代はハツとしたやうに、顔色をうごかしたが、

「え。」

と、かすかに言つて、そつと雄吉の顔色を覗ふやうに見上げた。

「僕にだつてこんなことを、無理に強ひる權利はないけれども、どう？ 俊夫君や、お母さんたちが言ふ通りに、溫和しく従ふことにしたら。」

「と言ふと、つまり雄吉さんも、わたしに俊夫さんといつしよに、東京に行くと、さうおつしやるんだわね。」

お美代は、さつと顔色を變へ、息を弾ませてゐた。

「よく考へて見ると、その方がやつぱり、お美代さんの幸福ぢやないかと、思ふだけけれども。」

「さう！」

眞蒼な顔色をして、お美代は固くなつて頷いたが、

「雄吉さんは、わたしが俊夫さんといつしよに、東京に行くといふことが、どんなことだか、知つてゐらつしやるの？ 知つてゐてやつぱりその方が、あたしの幸福だとおつしやるの？」と、詰め寄せるやうな烈しい勢ひで、聞いた。

「そんなに興奮してしまつては、僕の氣持だつて、十分話をする事が出来なくなつてしまふけれども。」

「あなたは、あたしをそんな女だと、思つてゐらつしやるの！」

長い睫毛に涙すら溜めて言つたかと思ふと、お美代は口惜しさうに、よく揃つた美しい前齒の先で、我れと我が唇の内側を、固く噛みしめてゐた。

「僕にお美代さんの氣持が、分らないわけではないけれども、しかし前にも言つた通り、現在の僕たちの事情を、よく考へて見ると、やつぱり親の言ふことを素直に聞いた方が、身のためだと思ふんだ。」

「いいわ。あたし、自分の生涯のことを、現在の事情だけに支配されやうとは、思つてゐませんから。」

美しき來訪者

二人の話聲は、初めは重症の父の枕頭であることを憚つて、つとめて低くしてゐた。それが次第に感情が昂ぶつて來るにつれて、お互ひに我れを忘れたやうになつて、高くなつてゐ

た。

「免下さい。」

一步土間に入つて来て、聲をかけた者があるのにも、二人は氣が附かなかつた。興奮した顔を向き合つて、話のつゞきに夢中になつてゐた。

「免下さい。」

もう一度言つて見たけれども、やつぱり同じことだつた。仕方がないのでその人は、そこにぼんやり佇んでゐた。

「わたし、このことばかりは、親の言ひ附けに背いたつて、仕方がないと思つてゐるの。一時は親不幸と思はれるかも知れないけれども、親不幸になつたつて、それも仕方がないと思ふわ。ちやんと約束を履行して、それで二人が立派になつてゆけば、その時には却つて今の親不幸が、立派に取返せるんですもの！」

お美代は熱して言ふと、ほのかに顔を報らめてゐた。

「僕、お美代さんには、まだ話さなかつたけれども——話す間もなかつたし、それに父の病氣が、突然こんなに悪化したので、どうなるか分らないけれども、僕も實は、東京に行くことに決心してゐるんです。」

「えつ。」

お美代は驚いて、大きく一つ肩で息をしたが、

「それ、本當？」

と、つい念を押して、ホツと溜息を吐いた。

「本當です。」

「あなたが、東京にいらつしやるんだつたら、わたしだつて、もちろん行くわ。」

「行まきすか。」

「え。」

元氣よく頷いたが、表情も生き／＼と、明るくなつて、

「だつてわたし、俊夫さんとは、いつしよに行きませんから。——あなたが東京にいらつしやるんだつたら、あたし、あなたといつしよに行くわ。」

「ところが、それが、さう都合よくは、いかないんです。」

「どうして？ わたし、雄吉さんといつしよに行つて、どんな苦勞だつてするわ。奉公してもいいし、工場にでも勤めるし、バスの車掌でも、どこか眞面目な商店にでも入つて、一生懸命に働くわ。そして、あなたの勉強なさるのを助けるわ。」

と言つてお美代は、生き／＼とした希望に、その美しい双眸をかがやかし、呼吸を弾ませた。

「免下さい。」

つか／＼と上り框まで進んで、三度び聲をかけたのは、鈴木別荘の令嬢の幸江だつた。

雄吉とお美代と、二人は同時に振り返つたが、びつくりしたやうに息を呑んだ。

別れの散歩に

やうやく氣が附いて、上り框まで飛んで出て来た雄吉に、幸江は、

「わたし、お別れに来たの。これから、東京へ歸るの。」

と、言つた。

洋装はしてゐるけれども、地味な青磁色のワンピースを着てゐた。頭髮などもパアマネントではあつたけれども、美しく、上品にセットしてゐた。以前のやうなケバ／＼しさは見えず、見るから淑やかな令嬢になつてゐるのは、雄吉には、まるで人が變つたやうな氣がした。

「さうですか。今年は、バカに早いぢやありませんか。」

雄吉には、何のために幸江が、わざ／＼別れを告げになど、こゝまで自分で出かけて来たのか、分らなかつた。

「あなた、ちよつとわたしといつしよに、散歩して下さらないかしら。」

しばらく躊躇してから、幸江はおづ／＼言つた。

さつきからお美代は、病人の枕許に坐つて、異様にかゞやく眼をひからせながら、美しい幸江の姿を、びつくりしたやうに、何か敵意に満ちた眼色で、じつと見つめてゐた。——幸江が、雄吉を散歩に誘ふのを聞くと、お美代の眉のあたりには、一層、險惡な色がきらめいた。そして、雄吉が何と答へるか、息を凝らすやうにして、一生懸命に耳を傾けてゐた。

「折角ですが、僕は今、ちよつと困るんですが。」

雄吉は、當惑さうに口籠つた。

「あら、どうして？」

見る／＼幸江の顔には、明らかな失望の色が泛んだ。

「父が、ひどく悪いものですから。」

「さう。それはイケませんわね。」

と言つたが、幸江は浮の空で、

「でも、ちよつとくらゐ、いいぢやないの。海岸までよ。」

「しかし、僕はやつぱり、留守にするわけにいかないのです。」

「話もあるのよ。」

「では、こゝで伺ひませうか。」

「こゝでは、ちよつと言ひにくいことなの……」

と、チラとお美代の方を見たが、刺すやうな鋭い眼が、じつと自分にそゝがれてゐるので、ちよつと首をすくめた。

「それは、困りましたな。」

「ちよつと都合して、いつしよに散歩して下さるといいのに。」

「すみません。」

「では、わたし、東京へ歸るのを、延ばさうかしら？」

幸江は、首をかしげるやうにして、甘えるやうな可愛らしい眼と口許をして、じつと雄吉の顔を見上げた。

雄吉は、少し狼狽して、顔色なども赧くなりながら、

「どうしてです？」

と、言つた。

「だつて、あなたがいつしよに、来て下さらないんですもの。——わたし、歸るまでに、どうしてもあなたに、話しておかなくちやならないことがあるの。」

言ひながらも幸江は、さつさと歸つてゆくでもなく、ぐづ／＼してゐた。やつぱりお美代の方が氣になると見えて、時々、チラ、チラと、話の合間に視線を投げかけるのであつた。

その度に、いつでもお美代の鋭い視線が、睨みつけるやうに自分の上に來てゐるので、幸江はつい、自分の眼を伏せなければならなかつた。

俊夫と幸江

外には俊夫が、じり／＼する氣持で、待つてゐた。しかし餘程、話が手間取ると見えて、雄吉はナカ／＼出て來なかつた。お美代に話をするからと言つて、家の中に引つ込んだ切り、いつまで待つても、姿を見せない。

その中、幸江が、わざ／＼訪ねて來て、家の中に入つて行つたと思つたら、これも容易なことでは、二度と出て來なかつた。

遠くからそれを見て雄吉の返事を待つてゐる俊夫としては、何が何だか、さつぱり様子が分らないまゝに、氣が氣ではなかつた。いつたいお美代の返事は、どうなつたのだらう？

幸江は何の用事があつて、こんなところに自分で、わざ／＼訪ねて來たのだらう？ と思ふと、そこにじつとしてゐることが出來なかつた。

磁石が鐵に引きつけられるやうに、こゝに待つてゐるからと、雄吉に約束したところか

ら、じり／＼動き出すと、いつの間にか、雄吉の家の前まで引き附けられて、来てしまつてゐた。

「ちや、わたし、とにかく歸るのを、二三日延ばすことにするわ。だから、その中にあなたの都合のいい時を見て、わたしの話しを聞いてね。」

さういふ幸江の聲が、俊夫の立つてゐるところまで、筒抜けのやうに聞えて来た。

「ですが、父の容態が、こんな工合だと、二三日と言つても、どうだか、分らないと思ひますから。」

「いいわ。そしたらわたし、もつと先に延ばしたつて、構はないのよ。とにかくわたし、もう一度あなたと、ゆつくり話が出来来るまでは、東京に歸らないことにするから、いいわ。」

「しかし、僕の都合なんか、分らないのですから。」

「さつさと早く、東京へ歸つた方がいいといふの？」

「いえ。決してさういふわけではありませんが。」

「いいから、わたしの好きにさせておいてよ！」

言つたかと思ふと、幸江の軽快な姿が、ひらりと、もう戸外に飛び出してゐた。——幸江は、戸外に飛び出した途端に、そこに呆やり佇んでゐる俊夫と、ばつたり顔を合せてしまつた。

「やあ。」

と言つて、俊夫が苦笑すると、幸江は思はず、

「あら。」

と、びつくりしたが、すぐに悪戯つぽく、につこりして、

「あなたも、こゝに来てゐたの。——いつたい、こんなところに呆やり立つて、何をしてゐたの？ それとも、誰かを待つてゐたところなの？」

と、つけ／＼聞いた。

「いや、べつに誰を待つてゐたといふわけではないのですが。」

俊夫は、言ひわけのやうに言つて、照れくさうにニヤニヤ笑つてゐた。

「知つてゐるわよ。あなたが、いくら隠さうとしたつて。」

幸江は、遠慮なんかしてゐなかつた。——二人は、そんなに親しい交際をしたことはなかつたけれども、東京にゐるとお互ひに顔を合せると、挨拶くらは交す仲だつた。それが、こんな田舎に来て、斯うしてばつたり逢つて見ると、つい心置きなく口が利けるのであつた。

「僕は、何もべつに、隠してゐるわけではないですが……」

俊夫が苦笑しながら、辯解しやうとするのを、幸江はとんちやくなく、

「いいから、いつしよに入らつしやいよ。わたしが、いいところに連れて行つて上げるから。」

と、手を取らんばかりにした。

「どこへ行くんです？」

「どこでもいいぢやないの？ わたしが、連れて行つて上げるんだから。」

「しかし、僕は……」

「わたしでは、駄目なの？ やつぱり、お美代さんでないよ。」

「そんな馬鹿な。」

と言つたが、俊夫はひどく慌て、顔まで赧くしてゐた。

「きまり悪がつてゐるのね。いいぢやないの。わたし、いい智慧を貸して上げるから、いらつしやいよ。」

と言ふと、それでもまだ、ためらひ勝ちにしてゐる俊夫を促し立て、二人は雄吉の家の門口から、行つてしまつた。

お美代の幻影

雄吉の運命に、大きな變轉が來た。それは、長く患つてゐた父が、たうとう亡くなつたこ

とだつた。

どうせ、以前の通りの元氣を、回復しさうもないことは分つてゐたし、殊に尿毒症を併發して、それが腦を冒し氣味になつてからは、いくら養生をしたところで、萬に一つも生命を取り留めることはないといふことは、醫者からも言ひ渡されてゐた。雄吉としても、それだけの覺悟はしてゐるつもりだつた。

しかし、たとへ醫者からは何と言はれ、自分では覺悟が出來てゐるつもりでも、いざ本當に父に亡くなられて見ると、まつたく打ちのめされたやうな氣持になつてしまつた。自分でも、こんなことでは仕方がないとは思ひながらも、やつぱり悲しいものは仕方がなかつた。

(「こんな時に、せめてお美代ちゃんでもゐてくれたら!」)

さう思はないことはなかつたけれども、お美代は、雄吉の父が亡くなる四五日前に、たうとう俊夫たち母子といつしよに、東京へ行つてしまつてゐた。雄吉を慰めてくれたり、力になつてくれたりする者は、誰もゐなかつた。

(いよ／＼僕は、ひとりぼつちだ。これからは、一人で生きてゆくんだ。どんなことをしても、偉くならなければ。)

と思ふと、さう思ふ瞬間には、何か勇氣が満ちてくるやうな氣もするのであつたが、やつぱり、父はもうゐないといふ現實に突き當らなければならなかつた。すると、心から心棒でも取れたやうに、急にがつかりもすれば、生きてゆく張り合ひも、なくなつたやうな氣がした。

そして雄吉は、いつともなしに惹かれるやうに、父のお墓に詣つて、香花を手向けてゐる。——父の墓は、裏の小高い丘の上にあつた。

或る日、さうして雄吉が、フラ／＼と父の墓に行くと、誰か美しい、華かな若い女が、父の墓前に、殊勝に額づいてゐるのであつた。

(おや?)と、思つて雄吉は立ちどまると、次ぎの瞬間には、

(お美代ちゃん!)

思はずこゝろに叫んで、驅けるやうに近づいて行つた。

「お美代ちゃん。」

うれしさうに聲を弾ませて呼んでから、立ちどまると、

「あら、わたしよ。」

しづかに立ち上つたのは、お美代とは似ても似つかない幸江ではないか！

新しき勇氣

雄吉は、意外なところで、全く思ひがけない幸江の姿を発見して、暫しは呆然としてしまつた。でも、だん／＼落着いてくると、幸江が父の墓参をしてくれたのは、うれしかつた。同時に幸江にたいして、今までにない親しみを感じた。

「どうして、こんなところに、來てゐるんです？」

しばらく無言の後に、雄吉は朴訥な調子で聞いた。

「あら、わたし、あなたのお父まさのお墓に、お詣りに來たんぢやありませんか。」

「それは分つてゐますが……いつ、こちらに入らしたんです？」

「今、來たばかりのところなの。」

「こんなに涼しくなつたのに、また、別荘に入らしたんですか？」

「いゝえ。わたし今度は、遊びに來たんぢやないのよ。」

「さうですか。——ご用でいらしたんですか？」

「あなたをお迎ひに來たのよ。」

「えつ。」

「そんなに、びつくりしなくなつていゝわ。とても工合よく話が進んで……早くあなたにお知らせして、すぐに上京していたゞきたいと思つて。」

びつくりするなと言はれても、これが、びつくりせずに見られるだらうか。——雄吉は、

東京に出てゆく決心をしてゐるには違ひないけれども、しかもそんなことを一度も、幸江に

打ち明けた覚えもなければ、上京について世話をしてくれるやうに、頼んだこともない。むしろ幸江からいろ／＼にすゝめられるのを、今までは頑なに拒んで来たはずである。——それを迎ひに来ただの、話が都合よく運んでゐるなどとは、いつたいどうしたことだらう？

「……………」

雄吉は、いくら考へても幸江の言葉が、よく呑み込めなかつたし、ぼんやりして眼を見張つてゐるばかりだつた。

「あなたが、一番心配してゐらしたお父さまは、斯うしてお亡くなりになつてしまつたし；いつまで、こんな田舎に愚圖々々してゐたつて、仕方ないでせう。一日も早く氣を取り直して、自分の生涯の目的に向つて、進まなければならぬぢやないの！ お父さまのお亡くなりになつたことはいくら悲しんでゐたつて、どうにもなることではないんですもの。それよりも早く目的に進むことが、かへつて亡くなつたお父さまにも、孝行をつくすことになるんぢやないの。ね、さうはお思ひにならない？」

幸江から言はれて見ると、なるほどその通りに違ひなかつた。雄吉は今までに自分として、それくらゐのことに氣が着かぬではなかつた。でも、勇氣を出していざこれからと思ひ切つて、支度始める日もなく、つい愚圖々々と、空しい日を送つて來てしまつた。

そこへ今、幸江から言はれて見ると、急にかつと眼が覺めたやうな氣がした。父の死は悲しいには違ひないが、しかしいつまでも悲しみに浸つてゐたところが、どうなるものでもない。本當にこゝで氣を取り直して、進むべき道を進まなければ！ と、新たな勇氣を以て思つた。

「わたしの父が、いろ／＼奔走して、飛行機の製作所に働けるやうに、運びをつけてくれました。あなた、人の厄介になるのはイヤだつて、おつしやつたでせう。だからさうしてご自分で働きながら、ご勉強なさつたらいいぢやないかと思ふわ。そこに入つて晝間は働いて、夜は飛行機學校の夜學部に通へばいいわ。さうして二年間勉強すれば、今度は練習所に入れるんですつて。何から何まで、ちやんといふ工合に運びが附いてゐるのよ。あなたはた

だ、こちらの始末をして出ていらつしやれば、それでいゝんだわ。」
と言はれて雄吉は、つい、

「どうも、いろ／＼有難うございます。」

と、頭を下げてしまつたのは、父の死後雄吉は孤獨に堪へて、人の情に餓えてゐたのと、幸江の深切に、ふかく感動したからに違ひなかつた。

お美代の立場

俊夫の家は、店は日本橋の傳馬町にあつたが、住居は吉祥寺の井の頭公園の近く、はるか杉や雑木の木の間越しに幽邃な池の面を見られるやうな、閑静な位置にあつた。洋館と日本建とからなつてゐる、かなり宏壯な一構へで、日本建の方は數寄屋造りの、相當に手の込んだものだつた。

お美代は、今、洋館の二階の窓に凭れて、ぼんやりと遠く池の面に眼をやつてゐた。屋敷

は廣いし、周囲は閑静だし、建物の間敷など二十室近くもあつて、東京の住居としては、いかにも廣々としてもゐるし、のびやかな方だつた。

でも、田舎に生れて、田舎で育つたお美代としては、東京に連れて來られてから、何かせこましく、息ぐるしい感じだつた。田舎にゐた時分のやうに、思ひ切つて伸び／＼とした気分にもなれないし、自由に手足を延ばして、飛びまはれないやうな氣持で、どうも窮屈だつた。すこし自由に動かうと思へば、鼻がつかへさうな氣がするし、どこもかしこも家や人がいつばいで、呼吸もらくには出來ないやうな氣がする。

(わたし、何だつてこんなところに、來てしまつたらう！)

つく／＼溜息を吐いて、後悔しても及ばなかつた。決して自ら好んで出て來たわけではな
いとしても、出て來てしまつたものを、今更、どうすることも出來なかつた。

(出て來るんぢやなかつた！)

と悔んで見ても、逃げて歸ることも出來ない。時々、雄吉には手紙を出して見るけれど

も、まだ一度として返事が来たことがない。——何度手紙を出しても、ハガキ一枚の返事もくれないところを見ると、雄吉は自分の仕打ちに餘つほど腹を立てゝゐるに違ひないのだ。
(無理はないわ。)

とは思ふけれども、しかし、あの場合にお美代としては、ほかにどうする道があつたらう？

お美代は、若し雄吉がその氣にさへなつてくれれば、二人がいつしよに逃げ出しても、どこへ行つて、どんな苦勞をしたつて、厭はない覺悟だつた。

しかし、雄吉としては、さうはいかない事情であることも、よく分つてゐた。人一倍親孝行の雄吉が、病氣で動けない父ひとりやを放つておいて、どこへ行つて出来るだらう。また、たとへ雄吉が、そんなことを敢てする氣になつたとしても、それでお美代としては、氣になつて、二人で逃げ出すわけにはいかない。そんな非道なことが出来るはずはないのだ。

だからあの場合、一番よかつたことは、雄吉が改めてお美代と、しつかりした約束をして、自分の傍を離れて、どこへも行つてくれるな！と、ハッキリ言つてくれることだつた。さうすればお美代としても、たとへ両親の言ひ付けには反いても、また俊夫やその母から何と言はれても、決して村からは離れなかつたらうし、雄吉を残して自分ひとり、東京へ出て来るやうなことは、決してしなかつたらう。

ところが雄吉は、新たに變らない心を誓つてくれないばかりか、かへつて俊夫に連れられて東京へ出た方が、お美代のためには幸福だと言つて、すゝめたくらるである。——ただ、そんな言葉だけではお美代の心は動かないとしても、新たに幸江といふものが登場したことは、お美代を絶望させた。幸江が雄吉の家まで訪ねて来たばかりではない。二人は既に相愛の仲で、幸江の父も許して、ゆく／＼は結婚することになつてゐるのだといふことを、俊夫から聞かされた時には、お美代はこれで我が生涯も終りだといふやうな氣がした。どうせ雄吉がそんな氣になつてゐるものを、この上自分が何を求めるべきであらう！と思つて、た

うとう雄吉には黙つて、俊夫や兩親から急かし立てられるまゝ、いつしよに東京に出て来てしまつた。

でも、それも自分が悪かつたと思へばこそ、後になつてから人目にかくれるやうにして、こつそり幾度雄吉に手紙を書いても、一度も返事をくれない。

(あんまりだわ！)

と、遂には怨めしくなり、腹立たしくなり、かなしくなつて、窓に凭れたまゝ、さめどくと泣いてしまふ。

お美代は、その窓邊から池の面を見るのが好きだつた……

濡れた瞳

「こんなところで、いつも／＼何してゐるんだ？」

誰か、そつと後に近づいて來た氣配がしたと思つたら、斯う聲をかけて寄り添つて來たの

は俊夫だつた。——今までにもお美代は、こゝに斯うして立つてゐるところを、何度俊夫に見られたことがあるか知れなかつた。

「……………」

無言で、お美代は振り返ると、少しばかり俊夫から、自分の身體を離して、傍らに身を寄せらるやうにした。

「泣いてゐたんだね。」

俊夫は、お美代の濡れた眼を覗くやうにした。

「……………」

「そんなに悲しいの？」

「……………」

「村のことを思ふんだらう？」

「えゝ。それは思ふわ。」

お美代は、正直に頷いた。

「村のことばかりではなく、お美代ちゃんも、やつぱり雄吉君のことが、忘れられないんじゃないか。」

「……………」

お美代は黙つて、濡れた瞳は遠く木の間越しに、池の面にやつてゐた。秋の夕日をいつばいに浴びた池の面は、金や銀にキラ／＼とかゞやいてゐた。

「そんなにいつまでも、お美代ちゃんの方でばかり一生懸命になつて思つたつて、雄吉君の方では、何んとも思つてなんかるないんだからね。」

「……………」

お美代は、依然として沈黙してゐたけれども、いくらこちらから手紙を出しても、一度も返事が来ないところを見ると、本當にさうかも知れないと思つた。いや、さうに違ひないと思つた。「いゝことを教へて上げようか。」

「……………」

「雄吉君のことだよ。」

「雄吉さんが、どうかなすつたんでせうか。」

お美代の顔が振り向いて、眞剣な瞳が、じつと俊夫の顔にそゝがれた。

「イヤになつてしまふな。——雄吉君のことと言へば、すぐにさうして顔色を變へて、一生懸命になるんだもの。」

俊夫は調戲ふやうに言つて、苦笑ひを浮べた。

神の如く

お美代は豫てから俊夫を、決して悪い人間ではないとは思つてゐる。でも、どうしても好きになれなかつた。これがムシが好かないとでもいふのだらうか？ 離れてゐる時だと、べつに何とも思はないのであるが、一度斯うして面と向つて、親しさうに口を利かれたり、馴

れ馴れしくされたりすると、急に蟲唾が走るほどイヤになる。

今もお美代は、才子振つた俊夫の態度や、輕薄らしい調子などを見てゐるうちに、急に逃げ出してしまひたくなつた。獨りでに身慄ひが出るほど、はげしい嫌惡感におそはれた。

だが、このまゝ逃げ出してしまつたのでは、肝腎の話が聞かれない。——雄吉のことを何か思はせぶりにほのめかされたので、お美代は、それがどんなことか聞きたくて、じつと我慢してゐた。

「いくらお美代ちゃんの方で、雄吉君のことを一生懸命に思つたつて、そんな氣持は、相手には、ちつとも通じないのだから、つまらないね。」

俊夫は、ニヤ／＼笑ひつゞけながら、冷かすやうに言つた。

「俊夫さんは、雄吉さんがどうしてゐらつしやるか、ご存じなの？」

「それは知つてゐないこともないね。」

「教へてよ。」

「お美代ちゃんは、知らないの。」

「えい。」

「これは驚いた。」

と言つて俊夫は、わざと仰山に、びつくりした表情をして見せた。——そんな時に俊夫の輕薄な調子は、一番露骨に現はれるので、お美代は我慢がならなかつたが、でも、そこをじつと辛抱して、

「わたし、村を出てから雄吉さんのことなど、何も知らないわ。」

と、かなしさうに言つた。

「どうして？ お美代ちゃんは雄吉君に、手紙も出さないの？」

「何度も出したわ。」

お美代は、正直に答へた。

「それで雄吉君からは、何とか言つて来た？」

「何とも言つて来ないのよ。」

「をかしいな。」

俊夫はしかつめらしい表情をして、首を傾げた。

「わたしが、何度手紙を出しても、雄吉さんからは一度だつて、返事が来たことはないのよ。」

「それは雄吉君の態度が、すこしひどいと思ふな。」

「きつと怒つてゐらつしやるのだと思ふわ。」

「雄吉君が、お美代さんにたいして、何も怒ることはないぢやないか。」

「でも、わたし、いくら怒られても、仕方がないと思つてゐるのよ。」

「なぜ？」

「だつて、わたし、あんな風にして村を出て来てしまつたんだもの。」

「あんな風つて、どんな風にさ？」

「雄吉さんはやつぱり、わたしを一人で、こんな工合にして東京には、出たくなかつたのよ。」

「だつて雄吉君は、自分からお美代ちゃんに、早く東京に行つた方がいゝからつて、すゝめたといふぢやないか。」

「それは、さうおつしやつたことは本當だけれども……でも、それは雄吉さんの本心ぢやなかつたのだと思ふわ。」

と言はれて俊夫は、内心ギクリとしたらしかつたが、すぐ何喰はぬふりを装つて、

「ちや、お美代ちゃんは、雄吉君が誰かに頼まれて、こゝろにもないことを言つたとしても思つてゐるの？」

と、白つばくれて聞いた。

「うゝん！ あたし、そんなことを思つてやしないわ。」

お美代が、つよく否定するのを見て、俊夫はやうやく安堵したらしい氣持を、ほつと顔色に浮べた。

毒の言葉

俊夫は、急に調子を變へて、

「僕が思ふのに、何よりも肝腎なことは、雄吉君のお美代ちゃんにたいする氣持ちやないか。」

と、言つた。

「え。」

お美代は、それはその通りだといふやうに頷いてゐた。

「若し、雄吉君の方に、お美代ちゃんに對する眞心といふものがあれば、たとへお美代ちゃんに雄吉君に黙つて、上京して來たとしても、手紙一本くらくら、くれたつて、いゝと

思ふね。」

「え。」

「それが、お美代ちゃんが上京する時にも、ちゃんと雄吉君に相談をしたし、雄吉君の方でも、お美代ちゃんに一人で上京した方がいゝと、立派な口を利いて、自分でもすゝめたくらゐぢやないか。」

「……………」

「それなのに今度は、お美代ちゃんの方から何本手紙を出しても、一度も返事をくれないなんて、すこしひどいと思ふな。——それでは雄吉君の眞心といふものを疑はれても、仕方がないぢやないか。」

俊夫は、我が事でも言ふやうにして、息卷いた。

「でも、わたし雄吉さんの氣持を、疑ひたくないわ。」

「お美代は澄み切つた、涼しい眼をして、清らかに言つた。」

「それでもまだお美代ちゃんは、雄吉君を信じてゐるの！」
俊夫は呆れたといふやうにして、眼を瞠つた。

「えゝ。信じてゐるわ。」

「焦れつたいね。」

「どうして？」

「あんまりお美代ちゃんが、人がいゝからさ。」

「だつて、わたし、人を疑ひたくはないんですもの。」

「だからお美代ちゃんは、どこまでも馬鹿にされるんだよ。」

「いゝわ。わたし、誰から馬鹿にされたつて。」

しづかにさう言つたお美代の言葉には、限りもない女の素直さと、可憐らしさが現はれてゐた。

「本當のことを、聞かせて上げようか……」

「本當のことつて？」

「雄吉君のことだよ。」

「雄吉さんのこと……」

と、ひとり言のやうに呟いて、お美代は暫く考へてゐた。

「雄吉君が、今どうしてゐるかといふことだよ。」

「えつ。」

「雄吉君が、どこにゐるかといふことだよ。」

「わたし、それを聞くのが、何だか怖ろしいわ。」

お美代は、急におのゝく眼をして、肩を小刻みに慄はせてゐた。

「怖ろしい？」

「えゝ。怖ろしいわ。」

「怖ろしくたつて、聞かなければならないんだよ。」

「……」

「雄吉君は、もう一ヶ月も前から、東京に来てゐるんだぜ。」

「えつ。」

お美代の顔の色は、さつと變つた。一度眞赤になつたかと思ふと、忽ちまた蒼くなつた。小さな胸は、萬雷が一時に鳴りはためくやうに、はげしくとどろき、乾いた唇から、くるしげに呼吸が掠れてゐた。

「雄吉君は、どこにゐると思ふ？」

「……」

（もう、止して！）と、お美代は叫びたいと思ひながら、聲はどうしても咽喉から出なかつた。

「ほら、あの人の家にゐるんだよ。村に別荘のある、あの美しいお嬢さんの家にさ。お嬢さんが自分で迎ひに出かけて行つて、いつしよに連れて來たんだと言つてゐたよ。幸江さんと

いふあのお嬢さんさ。僕も、つい二三日前、幸江さんと銀座で逢つた時に、あの人が勝ち誇つたやうに話したので、初めて知つたんだけれども……」

さう言ふ俊夫自身が勝ち誇つたやうに、喋つてゐる中に、お美代は見る／＼蒼ざめた額に、膏汗のやうなものを滲ませて聞かしてゐるが、突然、さながら朽木でも崩れるやうに、ぱつたり俊夫の足もとに倒れてしまつた。

「お美代ちゃん、」

びつくりして、度を失つた俊夫の慌たしい叫び聲が、既に仄ぐらくなつた四邊に、けたたましくひびき渡つた。

遊びの誘惑

雄吉は、幸江のすゝめで上京した翌日から、すぐに工場に通ふ身であつた。工場は中央沿線の〇〇にある。幸江の父の屋敷は三鷹村で、自轉車で通へば工場まで、十分とはかゝらな

かつた。

雄吉は、夜學に通はなければならないので、工場の方でも特別の便宜を興へてくれてゐた。即ち、他の人々よりも仕事を一時間だけ早く切り上げさせてくれることだつた。それでも急いで夕飯を掻き込むやうにして、西大久保の夜間學校まで駆け附けると、いつでも時間は、ちやうどいつばい／＼だつた。

日曜日は、第一と第三以外は、工場だけあつて、夜學は休み。しかし工場も早仕舞ひ、四時には終業のサイレンが鳴る。

「おい。君もいつしよに、新宿でもフラつかないか。」

雄吉が自轉車を押して、工場の通用門から出ると、そこに固まつて、何か相談でもしてゐたらしい同じ仲間の二三人の中の一人が、ニヤ／＼して雄吉に呼びかけた。でも雄吉は、

「いえ。僕は急ぎますから。」

と言つて、びよいと身輕に自轉車に飛び乗ると、力づよくペダルを踏んだ。

「だつて、今夜は夜學はないだらう。」

と、叫ぶ聲が後に聞えたけれども、雄吉は相手にならず、そのまま風を切つて歸つてしまつた。

いつものやうに自轉車を物置に片付け、顔や手足を洗つて、さつぱりした飛白の着物に着換へると、豫てから自分のために興へられてゐる六疊の部屋に引つ込み、机に向つた。第二の日曜日で、今夜は休みだけれども、復習やら豫習やらを、十分しておきたいと思つてゐた。

ちやうど、教科書を開いて、まだ一ページとは讀まないところへ、襖がすらりと開いた。

雄吉が、思はず振り返ると、和服姿の美しい幸江が、そこに佇ずんでゐて、雄吉の顔を見ると、ニツコリした。

「わたし、あなたを映畫に誘ひに来たのよ。日曜だといふのに、一晩くらの勉強をお休みにしたつて、いぢやないの。」

言ふなりツカノ、寄つて來ると、幸江は机の傍らに、べたりと坐つた。

恩と義理

雄吉は、幸江が自分の將來のことを思つて、いろ／＼深切にしてくれるのは、とても有難かつたし、ふかく感謝もしてゐた。——斯うして希望通りに東京へ出てくることも出来たし、毎日工場に通つて、働くことも出来る。それに何より嬉しいのは、夜學に通つて、好きな勉強が出来ることだ。これは全く自分の力といふよりも、幸江のお蔭と言はねばならなかつた。

そんな點では、幸江に對して心から感謝してゐるのだが、どうも幸江に執拗く付きまづはられてゐるやうなのが、イヤだつた。自分が折角勉強しようと思つてゐる時でも、そんなことには幸江は一向、思ひやりもない。勝手に自分が來たいと思ふ時には、どん／＼入つて來て、いつまでも話し込んだり、音楽會とか、映畫だとか、雄吉にはちつとも興味がありもし

ないことに、熱心に誘つたりする。

今も、やつぱりその通りである。——雄吉は折角、これから勉強をしようと思つて、やうやく教科書をひろげたばかりのところである。そこへ、いきなり入つて來て、机の傍に坐られ、映畫に誘ひに來たのだと言はれて、雄吉はうんざりしてしまつた。思はず濃い肩がひそめられ、危ふく溜息が洩れるところであつた。

「……………」

もちろん雄吉は、行くとも行かないとも言はない。しばらく返事もせずに、黙つてゐた。すると幸江は、更に雄吉に身を寄せるやうにして、

「ね、いいでせう？　いつしよに、行つて下さるでせう。」

まるで駄々ツ子が、何か強請る時でもあるやうに、華奢な肩先を揺すつて、甘えるやうに言つた。

「僕は、これから勉強しなければならんです。」

雄吉の言葉も、態度も、打つきらばうだつた。

「あら。だつて今夜は、夜學はない日ぢやないの。」

幸江はびつくりしたやうに、また不平さうに、眼を睜つた。

「學校は休みでも、家で勉強しなければならぬんです。」

「まあ。あなたはとても勉強家だわね。だから頼母しいんだわ。」

幸江は大人つぽく、分別くさい口を利いたが、

「でも、餘り一生懸命に勉強ばかりしたら、身體に毒だわ。」

「僕は、そんなに身體に毒になるほど、勉強してはるませんよ。」

と言つたが、雄吉はつい吹き出してしまつた。

「でも、夜學が休みの日には、家でまで勉強するなんて！ ずるぶん勉強家だと思ふわ。」

「わたしの兄さんや、兄さんのお友達なんかには、そんな勉強家は一人だつてゐないわ。」

「それは、境遇が違ふですからな。僕なんかどうしたつて、人一倍勉強しなくてはならない

んです。」

「どうして雄吉さんは、そんなに勉強ばかりしなくてはならないの？」

「これまで、かなり長い間、勉強を休んで來ましたからね。だから僕は、どうしても他の人とは、勉強がおくれてしまつてゐるんです。」

「でも、日曜の晩を二晩くらは、休んだつていいでせう。」

「映畫を見に行くのなら、一人でいらつしやい。」

「あら！ ひどいわ。一人でなんか映畫を見に行つたつて、ちつとも面白いことなんかないわ。」

「どうしてです？」

「追及されても幸江は、すぐには答へることが出來ず、ほのかに顔を赧らめてゐたが、しばらくしてから、

「わたし一人だけぢやなく、皆なさう言つてゐるわ。映畫なんか、一人で見るのは話らない

つて。」

と、呟いた。

弱氣の結果

雄吉は、全く苦痛だつた。——でも、仕方がなかつた。

餘り熱心に誘はれるものを、さうむげに斷つてしまふことも出来なかつた。自分の力で働き、自分の力で勉強してゐるとはいふやうなものの、やつぱりいろ／＼な點で幸江の世話になつてゐるのだと思へば、彼女の望むことを、頭からキツパリ斷つてしまへないのであつた。それは雄吉の弱氣だつたかも知れない。が、それくらゐの弱氣は、血もあり涙もある人間として、どうも仕方のないことに違ひなかつた。

「うれしいわ／＼。——わたし、これから直ぐに支度をするから、あなたも早くお支度なすつてね。」

幸江は、まるで十二三くらゐの無邪氣な少女のやうに、手をたゞき、小躍りせんばかりに喜んだ。

「僕は、べつに支度なんかありませんから……このまゝだつて、いいと思ひますから。」

雄吉は、小ざつぱりした久留米飛白の着物を着てゐた。——この着物は、自分もお美代も、まだ村にゐる時分に、お美代に見立て、買つて貰ひ、お美代が村の裁縫の先生に通つてゐる時に、彼女の手づから仕立て、くれたものである。

ふと雄吉は、そのことを思ひ出すと、つい臉が濕つぽくなつて來て、

（お美代ちゃんも東京に來て、今頃、どうしてゐるだらうな？）

と、思つた。

同じ東京にゐるとはいふものの、今では二人の間が、全く遠い／＼ものと思はれて、つい悲しくなつた。

「さあ、出かけませう。今からだ、ちやうどいいのよ。八時十分から始まるのだから。——

—指定席の切符は、ちゃんと買つてあるし……まだ、七時前だから、東京劇場まで行くのに、まるで一時間かゝるとしても、二三十分の餘裕があるでせう。——いつしよに行つて下さることになつて、わたし、ほんとに嬉しいわ。」

幸江は、いそ／＼として先に立ち、召使の手も借りずに、自分で雄吉の下駄まで揃へてくれたり、振り返つてニツコリ微笑しては、小鳥でも囀るやうに、明るい聲で、朗らかに喋る。そのいかにも心から嬉しうにして、喜んでゐる有様を見ると、雄吉は自分の勉強なんか、いくらかは犠牲にしても、いつしよに行くことにしたのは、何か善いことをしたやうな気がして、こゝろもホツとかるくなるのであつた。

「オリンピック映畫なのよ。民族の祭典つていふの。とてもいいんですつて。今、評判なのよ。」

「そんなに面白いですか？」

「でも、劇映畫ぢやないのよ。」

「さうですか。」

「雄吉さんのお友達たちは、評判してゐないの。」

「さあ。聞きませんな。」

「まあ、心細いのね。あなたのお友達は、皆な映畫を見ないのかしら。」

「見てゐるらしいですよ。蛇姫様だとか、支那の夜だとか、とてもスゴいつて、皆な言つてますもの。」

「あらイヤだ。そんなものと、これからわたしたちが、見に行く民族の祭典とは、比べものになりはしないわ。ほほ／＼。」

幸江は面白さうに、をかしさうに、聲を立て、笑つた。

「さうですか。」

雄吉は、そんなことは、實はどうでもよかつた。だから幸江が何がそんなにをかしくて笑ふのか、さつぱり呑み込めず、氣のない返事をしてゐた。

後を附ける人々

二人は玄關を出ると、そんな取り留めもないことを話しながら、門まで敷き詰めてある玉砂利を踏んで、しづかに足を運んだ。廣々と取つてある道の兩側には、椎だの、もちだの、もつこくだのといふ常磐木が、うつ／＼として茂つてゐた。闇は、既にすっかり四邊に迫つてゐた。たとへその邊の木下に一疋の猫が、うづくまつてゐるとしても、よく／＼氣を附けて見ない限りは、誰にも見えるはずもないほど暗い。

たゞ、暗がりに馴れた眼で、じつと瞳を凝らしてゐると、道の眞ん中を歩いてゆく二人の姿は、かすかに透かして見えるのであつた。仰ぐと降るやうに星が瞬いてゐる。その星明りのせるか、それとも、どこかに點いてゐる電氣の光りが、かすかに流れてくるせるかも知れない。とにかく暗がりの中に、二人が纏れるやうにして歩いてゆく姿が、かすかに／＼見分けられる。

雄吉は、少し離れて歩かうとするのだが、幸江はそれを、彼が遠慮してゐるのだとでも取つたのであらうか。——自分の方からびつたりと、肩を寄せてゆくのである。そして、近々と雄吉の顔に、自分の仄に白い顔を押し附けるやうにして、口を利いたり、笑つたりする。少し離れて、その様子を見てゐると、それは恰も戀人同志でもあるかのやうに、睦まじさうに見えるのであつた。

——いつの間に、どうしてそんなところに、身を潜ませてゐたのだらう。全く不思議だつた。でも、それは夢でもなく、幻でもなく、事實だつた。

二人が通りすぎて、門を出ると往來を、驛にゆく方へと曲つた時だつた。その植込の多行松の小蔭から、一人の女が暗がりの中に躍り出すと、そつと二人の後を附け初めた。五六間は隔つてゐるし、往來の片側は高い塀つゞきで、仄暗いので見透しが利かない。雄吉も幸江も、自分たちの後を附ける女があるなどといふことは、全く氣も附かない。

二人は相變らず肩と肩とが觸れ合ふばかりに並んで、格別急ぐでもなく、驛の方へとしづ

かに歩いてゆく。——不意に植込の小蔭から飛び出した女は、初めから同じくならぬ間隔で、どこまでも後を附けてゆくのである。

すると、またその女の後を、もう一人若い男が、どこからか姿を現はすと、附け初めた。やがてその若い男は、足を早めて、つか／＼と一人の女に追いついたと思つたら、いきなり右手を伸ばして、女の細い肩先を掴むやうにして、

「お美代ちゃん！」

と、四邊をはゞかるやうな低い聲で、叫んだ。

信ずる心

「えつ。」

不意に自分の名を呼ばれ、いきなり肩先など掴まれて、お美代はハツとして立ちすくんだ。

振り返つて見ると、俊夫のニヤ／＼微笑を浮べた顔が、自分の肩越しに、すぐ眼の前にあつたので、お美代は更に、びつくりせずにはゐられなかつた。

(あなたは、どうして、こんなところに……)

と聞かうとして、聲が出ないので息を呑んでみると、

「どう？ 見たでせう。」

と言つて俊夫は、勝ち誇つたやうに、ニヤリと、更に快心さうな微笑を浮べると、停車場の方に行つた雄吉と幸江の後を、眼で追つた。でも暗くもあつたし、それに距離が遠く離れてしまつたのだらう。さつきまで行く手に、睦じさうに肩を並べて歩いてゐた二人の姿は、いつの間にか、もう見えなくなつてしまつてゐた。

「僕の言つたことは、ウソではなかつたでせう？」

聞かれてお美代は、胸が張り裂けるやうに口惜しかつたけれども、

「……………」

口は利かずに、頷いて見せるよりほかになかった。

「だから、僕の言ふことを、信じる？」

「……………」

お美代は、信じないと言つたところが、しかし、自分の眼で確かに見たことを、否定するわけにはいかなかった。でも自分の口から俊夫に向つて、あなたの言つたことが本當だつたなどと言ふのは、イヤだつた。そんなことは口を裂かれても、お美代は自分の口からは言へなかつた。だから、黙つて俯向いてゐた。

「若し、まだ信じなければ、もつと信じられるやうなところを、これから見せて上げようか。」

「えつ。」

よく分らなくてお美代は、顔を上げると、じつと俊夫の顔を見つめた。

「僕といつしよに、来る？」

「はい、行くの。」

「どこだつていいから、僕といつしよに、随つて来れば分るよ。——僕はこれから、もつともつと本當のことを、お美代ちゃんに見せて上げたいと思ふ。そしてお美代ちゃんが、雄吉君に對して抱いてゐる夢を、覺まして上げなければならぬ。」

「それで、どこに行くの？」

「どこに行くつて……随つて来れば分るよ。」

言ひ捨て、俊夫は、もうさつさと歩き出した。

お美代は、しばらくそこに佇んで、考へてゐた。行かうか？ 行くまいか？ と思つて、思案してゐたのである。だが、いつまでそこに立つてゐるわけには、いかない。何を見ても、何を聞いてもお美代は、まだく雄吉を疑ふ心にはなれなかつた。あんな二人の様子を見、あんな言葉を聞いた刹那こそ、咄嗟にお美代は激しい衝撃を受け、危ふく取り亂すところだつた。でも、その場を過ぎて、すこしでも冷静を取返すと、やつぱり雄吉を信じてゐ

るお美代のころには、ちつとも變つたところはなかつた。

(きつと、これには何か深い事情があるのだわ。だから雄吉さんに會つて、よく聞いて見れば、何もかも、すつかりわかるのだわ。)と、さう思つた。

「おい。——何をぐづ／＼してゐるんだ。早く來ないの。」

俊夫は、いつの間にか四五間ばかり先に行つたところに立ち留つて、待つてゐた。待ち切れなくなつたやうに、大きな聲を出して呼ぶと、迎ひのために引つ返して来る。

「え、今行くわよ。」

お美代は、朗らかに返事をして、いそ／＼と駆け出した。

(どこにだつて行くわ。どんなところを見せられたつて、何を聞いたつて、わたしの心には變りがないのだからいいわ。——わたしが雄吉さんを信じてゐる心には、變りがないのだから。)

と、さう思ひながらお美代は、今はもう明るい心と、明るい氣持とで、カタ／＼と下駄の

音をひゞかせて馳けてゐた。

銀幕に「萬歳」

雄吉は心進まず、澁々とはあつたけれども、とにかく映畫館に行つて見ると、ちやうど、これから「民族の祭典」といふ評判の映畫が初まる前の、十分間の休憩時間になつたところだつた。出る人、入る人々で、廊下は人波がこつた返してゐるし、観客席も人でいつばいだつた。——雄吉のやうな田舎者の眼から見ると、よくもこれだけの人々が、どこから集つてくるのだらうと、不思議に思はれるくらゐだつた。

「ちやうど、よかつたわ。もう少しぐづ／＼してゐたら、遅れてしまふところだつたのに……」

と、幸江は咳きながら、でも上機嫌だつた。ニコニコして「さあ、こちらよ。」と、場所馴れないのでマゴ／＼してゐる雄吉を促がして、さつさと二階に上つて行つた。

二階正面のいい位置で、その座席が二つ空いてゐた。

「幸江、お前たち、ずるぶん遅かつたぢやないか。」

と言つたのは兄で、その近くに兄や、兄の友人などが四五人、ずらりと並んでゐた。皆な雄吉の村の別荘にも遊びに来たこともあるし、雄吉が東京に出て來てからも、時時は顔を合せたことのある連中だつた。

「やあ、よく來ましたね。」

「これは、珍らしい。」

「オリンピックの記録映畫だから、雄吉君なども一度は見ておいたつて、損にはならないよ。」

などと、皆な親しさに、そんな聲をかけてくれた。

初めの中は、雄吉に對して何か反感のやうなものを抱いてゐたらしかつた皆なも、この頃では雄吉の態度に、皆な感心してゐるらしい。顔を見る度に、それ／＼好意や親しみを見せ

てくれるやうになつた。——それもこれもみんな幸江が、いろ／＼な機會に雄吉のさつぱりした氣持や、高い理想を抱いてゐることや、並々ならぬ勉強家であることなどを、よく説明してくれたせゐに他ならぬらしいのだ。

間もなく、映畫は初つた。

見てゐる中に雄吉は、だん／＼身が入つて、昂奮が高まつてゆくのを、どうすることも出来なかつた。殊に日本の選手が勝つて、日章旗が高く掲げられるのを見、國歌が吹奏されるのを聴くと、血は湧き、胸は躍つた。思はず、

「萬歳。」

と叫び、臉にはいつぱい、涙を浮べてゐるのであつた。

並んで見てゐる幸江の氣持も、同じことなのだらう。

雄吉は、氣が附いて見ると、いつの間にか幸江の手が、しつかりと力いつぱい、自分の手に絡み附いてゐた。

(何をするんです！)

と、言葉に出しては咎めなかつたけれども、しかし雄吉は氣が附くと、そつと振り離さうとした。

でも、故意か、偶然か、蛇のやうに媚やかな手は、執拗くからみ附いたまゝ、ナカ／＼離れない。

スクリーンには、ちやうどマラソンが始まつて、日本選手がへと／＼になりながらも、猶ほ頑張りつゞけてゐるところが現はれたり、また隠れたりしてゐた。

雄吉は、その結果がどうなるかといふことが、氣になりながらも、自分の手に絡み附いてゐる媚やかな手のことが氣にかゝつて仕方がなかつた。——どうかして、そつとふり離さうとして焦るのだが、どうしても離れなかつた。

雄吉は、そんなに暑くろしいわけでもないのに、滿身にびつしより汗を浮べてゐた。さながら自分がマラソンの選手になつて、息限り根限り走りつゞけてゐるやうに、でも、雄吉の

全身にじむ汗は、冷たい汗だつた。

ひとり別れて

映畫が終り、パツと電燈がつくと、今まで眞暗だつた場内は、急に生き返つたやうに、華やかな光が溢れ、それまでシンとしてスクリーンに魅せられてゐた人々は、急にざはめき出した。——その時には、あれほど執拗に雄吉の手に絡み附いてゐた媚やかな手も、いつの間にか離れて、どこかへ見えなくなつてしまつた。

「よかつたな。」

「感激した。」

「表的だつたな。」

などと幸江の兄や、その兄の友人たちは、口々に囁いた。

幸江も昂奮したやうに頬を赭くし、双の瞳を情熱にうるませて、媚めかしくかゞやかし、

ふつくらしたその胸のあたりを、大きく、しづかに喘がせるやうにしてゐた。チラと雄吉の方を見たと思ふと、羞含むやうに、すぐにその眼を伏せて、

「どう？」と、かすかに囁いた。

「面白かつたかしら？」

「はあ。面白かつたです。」

雄吉は、すこし固くなつて、打つきら棒に答へた。

「これから皆なで、銀座に出て、お茶でも飲まう。」

と、兄が言ふと、幸江は恰も待つてゐたやうに、

「いいわね。」と、賛成した。

「行かう。」

「それがいい。」

「まだ、時間も早いから。」

皆な次々に賛成して、人波に揉まれながら、ぞろ／＼階下に降りて行つた。しかし雄吉は皆なといつしよに銀座に行く氣持など、ちつともなかつた。

「ちや、僕は、これで失禮しますから。」

雄吉は往來に出たところで、自分一人だけ數寄屋橋の驛の方に向つて別れようとする、先づ幸江がびつくりしたやうに、

「あら。」

と、かすかに叫んで、追ひすがつて來た。兄や、他の友人たちも、ぞろ／＼銀座に向つて歩いてゐたのが立ち留つた。

「あなた一人で先に歸るなんて、そんなこと言はないですよ。」

幸江は、泣かんばかりの悲しげな表情をして、逃がさじといふやうに、雄吉の手を取つた。

「いいぢやないか。——皆なといつしよに來たつて。」

幸江の兄もつか／＼と寄つてくるとすゝめるのであつた。

物問ふ瞳

ひとり別れて、自分だけ先に歸るつもりだつたのが、皆なから手を取るやうにして誘はれて見ると、雄吉も自分の強情を、張り通すわけにかなかつた。

(お前は墮落したのか。こんな有閑人といつしよになつて、夜更けるまで遊び歩いたりして、それでいいのか。)

はげしい自責を感じながらも、やつぱり皆なといつしよに、銀座まで跟いてゆくよりほかなかつた。

舗道をぞろ／＼と歩きながら、あそこがいいとか、ここがいいとか、どこに入るかといふ意見が、容易にまとまらなかつた。たうとう幸江が先に立つて、銀座八丁目の或る大きなフルーツ・パラーの二階に上つて行つた。すると皆なも異議なくその後、ぞろ／＼と従つ

た。雄吉は一番後から上つて行つた。

一番奥まつた部屋に入ると、そこかなり混んでゐたが、それでもボーイが大きな圓テーブルを一つ轉旋して、あけてくれた。テーブルに着くとオレンジ・エードとか、アイスクリームだとか、グレープ・ジュースだとか、皆な思ひ／＼の飲みものを、注文した。——雄吉は一人、冷たい紅茶を喫むことにした。

皆なの前にそれ／＼注文した飲み物のコップが配られ、ちやうど雄吉が、紅茶の中に浮いてゐる氷のかけらを、スプーンで掻き廻してゐる時だつた。何心なく偶と入口の方を見たと思ふと、

「あつ。」

と、口の中にかすかな叫び聲を洩らして、持つてゐたスープをテーブルの上に投げ捨てる、すつくと椅子から立ち上つてゐた。それと殆んど同時に、入口の方を眼がけて、つかつかと進んでゆくのであつた。——眼をじつと、一點に据ゑて。

雄吉が一點に瞳を据ゑて、進んで行く方を見ると、そこにはお美代が小さくなつて、がたがた慄へながら立ちすくんでゐた。恰も俊夫の後にかくれるやうにして、眞蒼な顔の色をして、眼ばかりキラ／＼とかゞやかしてゐた。

「お美代ちゃん。」

傍まで近づくと雄吉は、懐かしさうに呼んだ。

意外といふ表情は、かくすことが出来なかつたけれども、それでも眼も顔も嬉しさうにかがやいてゐた。その聲も、その呼び方も、田舎にゐた時と、ちつとも變つたところはなかつた。

「……………」

お美代は、心では懐かしいと思ひながら、胸がいつばいになつて、咄嗟には口を利くことも出来なかつた。——どう言つたらいいのか、分らなかつた。たゞ、燃えるやうな瞳が、じつと雄吉の上に注がれてゐるだけだつた。

「僕は、お美代ちゃんのことを、どんなに心配してゐたか……それなのに、なぜ手紙をくれなかつたの？ どうして居所も、知らせてはくれなかつたの？ 僕は、どんなにお美代ちゃんのある所を、探したか知れないんだよ。」

それは恨むといふよりも、雄吉は悲しさうに言つた。

「わたしだつて、心配してゐたのよ。東京に出て來てから、何度も／＼手紙を出したのに、一度だつて返事も下さらないんですもの。わたし雄吉さんは、やつぱり、わたしが東京へ出て來たことを、怒つてゐらつしやるのだとばかり思つてゐたわ。そして、とても悲しかつたの。」

と言つてお美代の眼は、かすかに涙ぐんで來た。

「えつ。そんなに何度も手紙をくれたつて、それは本當？」

「えゝ。本當だわ。」

「だつて僕は、一度も手紙なんか、受取らないよ。」

「ぢや、わたしの出したはずの手紙、どうなつたんでせう？」

お美代は、獨りごとのやうに咳いたが、その二つの瞳は、この時ちらりと、何か問ひかけるやうに、そこに立つてゐる俊夫の顔を仰いだ。

お美代の眼が、物問ひた氣にして自分に向けられると、それまで平氣だつた俊夫は、すっかり慌て、

「手紙のことなんか、僕が知るものか。そんなことを僕に聞いたつて、僕は知らないよ。この頃は郵便物も非常に輻輳してゐて忙しいから、紛失することだつて、ナカ／＼多いんだよ。」

と、赧い顔をして、そんな辯解にもならぬやうなことを、しどろもどろに言つてゐた。

表面の深切

俊夫と幸江や、幸江の兄たちとは友達である。入口に俊夫と、お美代との姿を見附けた彼

等が、黙つてそのまゝにしておくはずはなかつた。

「やあ、俊夫君。」

と、兄が聲をかければ、幸江も椅子から立つて、

「まあ、俊夫さん。——お美代さんと、ごいっしょよね。」

と言ひながら、急いで彼等の傍に寄つてゆくと、

「ちやうど、よかつたわ。いいところで逢つたものね。さあ、こつちにいらつしやいよ。わたしたちといっしょになつて、何か召上れよ。」

有無を言はさぬといふやうにして、二人を自分たちのテーブルに誘つた。

「お美代さんは、何を召上ること？」 俊夫さんのお仕込みで、ちよつとの間に、あなたもカナカモダンになつたわね。銀ブラなんかして。アイスクリームがいいこと？ それともオレンヂ・エード？」

幸江は、冷かしてゐるのか、それとも心からの深切からか、それは分らなかつたけれど

も、お美代にたいして、とても愛想がよかつた。——すぐ自分の隣の椅子に着かせて、何れとなく世話をやいた。

「わたし、何にも頂きたくありませんわ。」

お美代は、いくら深切にされても、どうしても打ち解けることが出来なかつた。身體を固くして、小さくなつて椅子に腰掛けてゐた。

「飲まないの？ どうして？」

「飲みたくありませんから。」

「そんなこと言はないで、何か召上れよ。ちや、雄吉さんと同じに、アイス・ティを召上る？」

「……………」

お美代は、アイス・ティが何だか分らなかつたので、黙つてゐた。それでも、雄吉と同じものだといふなら、それでもいいと思つてゐた。

幸江を中にして、その右側にお美代、左側に雄吉が、椅子に着いてゐた。——幸江は、お美代にたいして深切にすると同時に、雄吉にたいしても、とても優しく、何だ彼だと世話をやいた。

その世話の焼きぶりを傍から見ると、二人は恰も戀人同志か、若夫婦といふやうに見えなかつた。——飲物の滴が、雄吉の胸のあたりに零れたといつては、自分のハンカチーフを出して拭いてやつたり、冷たい紅茶を飲むストロオが折れて、飲み物の通りがわるくなつたと言つては、わざわざボーイを呼んで、新しいのと取り換へさせたり……痒いところに手の届くやうな、忠實な世話ぶりだつた。

お美代は、その様子を見てゐる中に、だん／＼悲しくなつた。自分でもそれと氣が附かぬ間に、つい微かな溜息を、何度も吐いたり、喉の中には、うすく涙をにじませたりしてゐた。

ちやうど丸テーブルを間にして、お美代の正面の位置に腰掛けた俊夫は、勝ち誇つたやうに、

(どんなもんだ。)

と言はぬばかりの眼つきをしては、チラリ／＼と、打ち挫がれたやうなお美代の顔を見てゐた。

「あら、お美代さん。どうかしたの？ 泣いたりして。」

幸江は、初めて気が附いたやうに、仰山に言つた。

「いゝえ。」

お美代は、かすかに頭を振つたけれども、その場にゐたたまらなくなつたやうに、つと椅子を立つた。

お美代の絶望

「どうしたの？ どこへ行くの。トイレット？」

幸江は、お美代の後から追つかけるやうに聞いた。

「わたし、歸りますから。」と言つてお美代は、ちよつと立ち留まると、涙ぐんだ眼で振り返つた。

「歸るつて……あなた一人で？」

「えゝ。」

「一人で歸れるの？ それでは、折角いつしよにいらした俊夫さんに、わるくはないこと？」

「それぢや、僕も、これで失禮しますから……」

言ふなり俊夫が、お美代の後を追ふと、雄吉もつゞいて、お美代の後を追つかけた。

「お美代ちゃん。僕は、まだ君に、話があるんだ。」

と言つた。するとお美代は、もう一度立ち止まつて、初めて救はれたやうな顔を振り向くと、ぱつとかゞやいた眼を見張つた。が、すぐに幸江が、雄吉の袂を捉へてゐた。

「あなたは、行かなくなつて、いいぢやないの。わたしたちと、いつしよに來たんですから、いつしよに歸るのが、當り前ぢやありませんか。」

何か決めつけるやうな、きびしい調子で言った。

「ですが、僕はお美代ちゃんに、話があるんですから。」

「そんな話なんか、何も無理に今夜でなくても、いいぢやないの。」

「そこを、離して下さい。」

雄吉は、掴まれてゐる袂を無理にも振り放さうとした。でも、幸江は、顔ではニコ／＼笑ひながら、しつかり握つてゐる白い華奢な手を、決して放さうとはしなかつた。

立ち止まつたまふ、細い眉をひそめるやうにして、その様子を見てゐたお美代の顔は、見る見る中に絶望的に蒼ざめたが、

「雄吉さん。いつしよに來ては下さらないの。わたしも、いろ／＼お話ししなければならぬことがあるのよ。」

と、悲痛な聲で言った。しかし、雄吉の袂を掴んでゐる幸江の手は、どうしても離れないばかりか、ますます強く力がこめられるばかりだつた。

それを振り放さうとして雄吉は、焦りながら、

「お美代ちゃん、待つて！」

と叫んだけれども、お美代は、今にもわつと泣き出すのではないかと思はれるやうな、かなしさうな表情をして、一方では俊夫に急かし立てられながら、い／＼と歸つて行つた。

深夜の客

雄吉は、折角お美代に逢つたと思つたら、何一つ親しい言葉を交す暇もなく、あんな工合にして、本意なく別れてしまはなければならなかつた。でも、お美代の無事な姿を見たことは、うれしいと同時に、安心でもあつた。——それまでは、東京に出たといふことは分つてゐても、どこにゐるのかも分らず、無事であるのか、どうかも分らなかつた。俊夫のところにあるに違ひないと思つて、自分の方から何度手紙を出しても、一度だつて、返事をくれたこともない。生きてゐるのか、それとも死んででもしまつたのか？ 村を出てから一度だつ

て、お美代から消息を貰つたことはない。

それがあゝして、俊夫といつしよにゐるところを見ると、やつぱりお美代は上京して、俊夫の家に無事に身を寄せてゐるのだ。それを自分に對して一度の便りもくれず、自分の方から、いくら手紙を出しても、ハガキ一本の返事すらくれないのは、何か深い考へのあつてのことか。それでなければ、自分の氣持を誤解でもして、きつと腹を立ててゐるのだらうと思つた。

誤解されたり、腹を立てられたりしてゐるのだと思ふと、かなり辛かつたけれども、でもそんなことは、親しく會つて詳しく話をすれば、すぐに分ることだと思つた。——それよりも何よりも、お美代の現在ゐるところも分つたし、無事な姿を見たことが、雄吉は何よりも嬉しかつた。

あの時は——あんな工合にして、何も話は出来なかつたけれども、居どころがハツキリ分つた以上、一度のつくり訪ねて、詳しく話をしようと思つた。日曜日に二三時間の暇を

つくつて、二人で郊外に散歩に行つても、いいと思つた。

ところが、次の日曜日は、駄目になつてしまつたし、普通の日には工場の勤務がある上に、夜學があるので、とても他人を訪ねるところではなかつた。

(この次の日曜日にしよう。)

さう思つて、忘れるといふわけではなかつたが、月曜、火曜と、いつもの通りに工場に通ひ、夜學にも行つた。そして、やがて十一時に近い頃になつて、屋敷に歸つて見ると、まだ職工服も脱がない中に、幸江がいきなり部屋に飛込んで来て、

「お客さまよ。」

と、言つた。

「僕にですか？」

こんな晩くなつて、雄吉は自分のところに客が訪ねてくる心當りなど、ちつともなかつた。

「ええ。だから、そのままでもいいから、早くいらつしやい。」

と言はれて雄吉は、油じみた職工服を着換へる間もなく、幸江に手を取られんばかりにして、急かし立てられて、玄關脇の應接室に入つて行つた。

「やあ。」

その肘掛椅子に凭つてゐたのは、思ひがけなくも俊夫だつた。俊夫は、心配さうな顔つきをして、何か考へごとでもするやうに、じつとテーブルの一點を見つめてゐた。雄吉が、幸江に連れられて入つて来たのを見ると、親しさうに聲をかけたが、その眼は注意ぶかく雄吉の様子を見まもつた。

「あゝ、あなたでしたか。」

雄吉は、まつたく思ひがけなかつたので、意外さうに眼を瞠つたが、何用があつてこんな時間に、わざわざ訪問して来たのかと思ふと、ちよつと不安な氣がしないでもなかつた。

「まあ、掛けたまへ。」

俊夫は、雄吉がぎこちない氣持で、いくらか固くなつて立つてゐると、愛想よくすゝめてくれたし、幸江も、

「そんなに、いやちこばつてゐないで、お掛けなさいな。」

と言つて、自分もその肘掛椅子に、腰を下ろした。

「失禮します。」

雄吉は、いつまでも自分一人だけ、立つてゐるわけにもいかないの、その小椅子のつに、小さくなつて腰掛けた。

でも、俊夫も、幸江も、しばらくは、何も口をきかなかつた。どんな用事があるのか？

雄吉をわざ／＼應接室まで呼びつけておいて、二人とも口を噤んだまゝ、注意ぶかい視線を、じつと雄吉の上にそゝいでゐるだけである……

だん／＼雄吉は窮屈になつて、息ぐるしさを感じて来て、

「何か、僕に御用があるんでせうか？ 用があるんでしたら早く、話してくれませんか。」

と、少し焦々した氣持で催促せずにはゐられなかつた。

お美代の家出

「用事を話す前に、僕は君に、特別におねがひしておきたいことがあるんだが。」
しばらく経つてから、俊夫は妙に改つた調子で言つた。

「どんなことか知りませんが、遠慮なく言つて下さい。」

朝の早い雄吉は、相手の煮え切らない、ぐづ／＼した態度がもどかしく、苛々するよりも腹立たしかつた。

「實は、雄吉君。どんなことでも僕が聞くことに、決して隠し立てして貰ひたくはないんだが。」

「本當よ、雄吉さん。惹ひあなたが隠し立てしたりすると、かへつて面倒なことになるのよ。」

幸江も傍から口を添へたが、雄吉としては二人が何のためにそんなに、物々しく念を押したりしなればならないのかさつぱり分らなかつた。隠し立てをするも、しないも、俊夫はいつたい自分に、どんなことを聞かうとしてゐるのか。

「僕は、あなた方の前に、べつに隠し立てをしなければならぬやうな、そんな悪いことをしてゐる覚えは、何もないのですが。」

と、雄吉はムカ／＼するやうな腹立たしさを、苦笑に紛らすよりほかなかつた。

「では、聞かぬ、雄吉君。君はお美代ちゃんを、一體、どこに置いてゐるんだ？ どこに連れて行つたんだ？」

「えつ。」

「正直に言つてくれたまへ。——今の中に正直に打ち明けてくれさへすれば、君が今までしたことは不問にして、このまま穩便に済ますことにしてもいいから。どうぞ、本當のことを聞かせてくれたまへ。」

と言つて俊天は、狡さうな眼をキラ／＼かゞやかせながら、ぺこ／＼と頭を二つ三つ下げた。

雄吉は、寝耳に水で、その瞬間、全くあつ氣に取られてしまった。

「お美代ちやんが……お美代ちやんが、どうか、したんですか？」

雄吉は、眼を睜り、息を呑んだ。

「だから、どうしたのかと、君に訊いてるんぢやないか。」

「お美代さんがどうしたのか……僕は知りませんが、いつたいお美代さんが、どうしたんです？」

「家出したんだよ。」

「家出？」

「今朝から家を出たきり、いつまで経つても歸つて来ないんだ。どうしたのかと思つて、心配して待つてゐると、夜の八時ごろになつて、こんな速達が来たので、それで初めて家出

たといふことが、分つたんだ。ちよつと読んで見たまへ。」

と言ひながら俊夫は、急いでポケットを探ると、一通のハガキを取り出して、雄吉の前に突き出した。

我が心に誓ふ

雄吉が、ハガキを受取つて読んで見ると、文句は極めて簡単なものだった。それも、どこかの郵便局の窓口でも、ハガキを買つて、其場で急いで走り書したものに違ひなかつた。

わたしは、これ切りもう歸りませんから、永い間いろ／＼お世話さまになり、その上、無断で家を出てしまつたりして、ご心配をかけて申わけありません。わたしはこれから自分で働いて、ひとりで身を立てゝゆきます。決して間違ひなどしませんから、餘り心配しないで下さい。また行衛なども探さないで下さい。よく／＼考へた上で、こんなことをし

たのですから、たとへ見つけられても、わたしは歸りませんから。

鉛筆の走り書ではあるが、文字などにも、少しも取亂したところはなく、叮嚀に、上手に書いてある。——ハガキの文句にもある通りに、本當によく考へた上で、決行したのであらう。

雄吉は、その短い文句を一度読み下しただけでは足りず、繰返して二度読み、三度讀んだ。幾度も讀み返して見て、じつと考へ込んでゐた。

「どう？ 雄吉さん。あなた、お美代さんを、どこに隠したのよ。」

幸江は口元に、皮肉な微笑の影を漂はせて訊いた。

「僕が、隠したりするはずはありませんが……本當にお美代さんは、どこに行つてしまつたのでせう。」

雄吉は不安さうな眼をして、二人を見比べて溜息を吐いた。

「だつて、そのスタンプを見てごらんさない。工場の傍の局ぢやないの。だから、二人で謀し合せて、そんなハガキを出したんぢやないの。」

「えつ。工場の傍の郵便局ですつて。」

言ひながら見ると、なるほどそこに捺されてゐるのは、工場の直ぐ近くの局のスタンプに違ひなかつた。

「こゝまで来て速達を出してゐるのに、どうしてちよつとでも、僕のところ寄つてくれなかつたのだらう。」

雄吉は、スタンプを確かめると、つくづく嘆息した。

その様子を、俊夫も幸江も、じつと見まもつてゐたが、しかし、べつに白ばつてゐるのだとも、芝居をしてゐるのだとも思へなかつた。——心からお美代の行衛を心配し、その身に間違ひのないやうにと念じてゐる眞剣さが、その表情にも、態度にも、ハッキリ現はれてゐた。

「ちや、本當に君は、お美代ちゃんの行衛を、知らないんだね？」

俊夫が、がっかりしたやうに念を押せば、幸江は、

「お美代さんは、工場にあんたを訪ねたんぢやなかつたの？」

と、これは聊か安堵の胸を、撫で下ろしたといふ風である。

「お美代さんが、どこへ行つてしまつたのか、僕は知りません。しかし、まだ年齢もゆかず、都會の生活にも馴れないお美代ちゃんがこれから一人で身を立てて行くなんて、それは恐しいことです。どんなひどい目に逢されるか知れないでせう。このまゝ、打つちやつておくわけにはいきません。これから僕は一生懸命になつて、お美代ちゃんの行衛を探します。どんなことをしても、きつと探し出さずにはおきません！」

雄吉は、眼の前の二人に向つて誓ふといふよりも、それを自分自身に向つて、固く誓ふやうに言つた。

(終)

故郷の唄

歡送會

親類や、友達や、村の人々が三十人近くも集つて盛んな歡送會を開いてくれた。もちろん座敷だけでは狭いので、縁側にまでハミ出した。これは公式のものではないのだが、山間の小さな村のことで、全村合しても五十戸足らずの戸數で、一村さながら一家族のやうに親しい。だから公式の歡送會ではなくても村長さんも、駐在所のお巡りさんも、分教場の先生も皆な出席してくれた。べつにご馳走があるわけでもなく、改つた挨拶があるわけでもない。冷酒に、芋や、牛蒡や、こんにやくなどの煮つけに、スルメの焼いたのくらゐのもの。それも人手の足りないことは分つてゐるので、家の人々が支度をするまでもなく、近所の人たちが皆な寄り集つて、何から何まで整へてくれた。

酒は持ち寄り、座敷だけ、應召する桂田敬作の内に集まつたといふだけで、肴も村の人たちの寄附。砂糖、醤油、鹽のやうなものまで、一物と雖も心して、桂田の家のは使はな

いやうにして、村人の厚い情けを見せた今宵のこの歡送會である。

床柱を背に敬作、その右隣りが父の吾助、左隣りが村長、順々に居流れた。——この村からの初めての應召者だといふので、皆なが目出度い／＼と、祝つてくれる。後のことは引受けるから心配するなと力づけたり、しつかりお國のために働いて、卑怯な眞似をするのではないぞと、口々に激勵したりしてくれる。

敬作は、まだ出征しない中から、武者振ひをするやうだつた。父は我が子の名譽、一家の名譽に、感激の涙に暮れてゐるし、縁内障で、この二年以來眼が見えず、それに持病の神経痛が嵩じて、床に就いてゐる母は、この席に連なることが出来ないで、座敷と納戸の間の帯戸を開け放して、光景を見ることは出来ないのだが、耳だけで聞いて、さつきからもう泣いてゐる。——村長さん初め學校の先生や、村の人皆なが斯うして、こんなあばら家に集つて来て、悴の敬作一人を中心にして、いろ／＼に言つてくれるのが、有難いやら、うれしいやら……つい泣かすにはゐられない。

村長の發聲で、萬歳を三唱してから、皆なは、

「明日は早いだから。」

と、まだ八時前に、それ／＼引取つてしまつた。

後には近所の女の人が二三人と、それに敬作の友人が二人ばかり残つて、その邊に散らばつてゐる食器類を洗つて片附けたり、座敷の掃除まできちんとして、それから打ち揃つて歸つて行つた。

「ちや、わたしもこれで歸りますから。明日の朝は、どうせステーションまで送らせて貰ひますけれども……どうぞ身體を氣を付けて。」

一番終ひまで、臺所の流し元で、何か／＼働いてゐたとし子は、敬作の前に来て、改つた挨拶をした。

「どうもいろ／＼、ご苦勞さんでしたね。遅くまで何かと働いてもらつて、さぞ疲れたでせう。」

敬作は、ニッコリして丁寧にお禮の言葉を述べた。——二十六歳とは見えず分別くさく、ひどく落着いてゐるし、村の青年團でも副團長を勤めて来たからで、人物はなか／＼しつかりしてゐる。

とし子の兄の順吉とは、年齢も同じだし、高等科を卒業するまで、ずっと同窓で、無二の親友だった。それに二人とも、この附近の模範青年として、縣知事から二度も、表彰されたことがある。——その兄の順吉も、皆なが歸つてしまつた後、まだ一人残つて、さつきから父の吾助と、今年の作附けの話などをしてゐた。

「いゝえ。ちつとも疲れはしないわ。これくらゐのこと。」

とし子は笑つて言つたが、實際、野良を働くことを思へばこんな手傳ひくらゐ、何でもなかつた。

「それに明日の朝は早いのだし、ステーションまでは遠いのだし、わざわざ送つて貰はなくでも、たくさんですよ。」

「わたし、送らせて貰ふの！」

いつでも素直なとし子が、敢然として言つた。

「あなたが何とおつしやつても、わたし、せめてステーションまで、送らせてもらふわ。」言つたかと思ふと、とし子は危ふく喉がうるんで、涙があふれさうになつたので、くると向ふをむくと、さつさと立ち上つた。そして急いで自分の草履を突っかけて、ぱつと外に飛び出してしまつた。

外は生ぬるいやうな春の宵で、そこでも、こゝでも、幼ない蛙の聲が、はにかむやうに時間覚えてゐた。空はどんよりと薄曇りをしてゐたが、かさのかゝつた月が、ぼつかりと中空に浮んで、地上も空間も、薄絹にでもつゝまれたやうに、ぼんやりと明るんで、村を圍んでゐる四方の山々が、影繪でも見えるやうに、朧ろに見えてゐる——。

敬作の家を飛び出したとし子は、自分の家に歸るとは反對の道を、とぼ／＼と彷徨ふやうに歩いて行つた。

一人の青年

順吉は、妹のとし子が歸つてからも、まだ暫らくの間、吾助の話し相手になつてゐた。また、寝てゐる母のお房に向つても、何かと力づけるやうな言葉を並べて、心から慰めてゐた。

「小母さんも病氣で、たつた一人力にしてゐる敬作君に、出征されるのは、心細いかも知れないけれども、何、そんなに心配したものでないですよ。村の人たちだつて、皆な力を合せて手傳つてくれるし、僕や、とし子だつて、出来るだけのことはしますからね。」

と言はれるとお房は、やつぱり心強いのであつた。

「何しろ、わたしはこの通りの病人で、人の厄介にはなつても、家のことすら碌には出来ないものだから……肝腎の敬作がなくなると、後にはお父つあん一人で、どうしたらいいかと、心配でね。こんな時に、せめて千代子でもゐてくれると、どんなに力になるか知れない

のだけれども、家を出た切り便り一度寄越さなくらゐるだから、今度の敬作の召集のことだつて、知るはずもなし、知らせることも出来ずね。」

と、またしてもお房の言葉が、愚痴になると、傍に聞いてゐた父の吾助は、堪りかねたやうに、

「婆さんや。また、あんな奴のことを言ひ出して！ 家も、親も捨て、勝手に出て行つた奴ぢやないか。あんな者は、親でもなければ、子でもない！ たとへ歸つて来るやうなことがあつても、一足だつて家に入れることぢやない。」

吾助は、千代子のこと、言へば、すぐに腹を立てる。

「ほんとに千代子は、自分の腹を痛めた娘ながら、あの娘の振舞は考へるだけでも腹が立つ。それに引代へ敬作は、たゞ、小さい時からの育ての親だといふだけで、血を分けた我が實の子も及ばんやうな孝行者で、わたしたちを大事にしてくれるばかりでなく、自分が戦に出て行くといふ場合にも、後々のことまで心配してくれて……ほんとに勿體ない。」

お房は、いつの間にか、もうおろおろと泣き出してゐた。

「ぢや、小父さんも小母さんも、また明日の朝、來ますから。ではおやすみなさい。」

三年前に家出した娘の愚痴が始まると、いつまでもキリがなくなることが分つてゐるので、順吉は歸り支度もそこ／＼に、上櫃から降りた。すると、敬作は、

「僕も、ちよつとその邊まで、散歩に行つて來るから。」

と言つて、土間に脱いであつた草履を突つかけると、順吉の後につゞいた。敬作の家から順吉の家までは、小さな流れに添ふて、五丁とは離れてゐない。道は石塊の多い、だらだら坂道だつたが、雪解け水が山から流れて來る小流れは、ほとんど川縁にあふれるくらの滾滾と水嵩が増して、かすかなせゝらぎの音が、さゝやくやうに、忍び笑ひでもするやうに臍の足もとに絶えず聞えてゐるのであつた。

二人は、しばらくの間、顔を並べて、どちらからも口を利かず、しづかに足を運んでゐた。

小さい時から同じ村で、家も近く、學校も同じなら、境遇なども殆んど似たやうなもので、仲のいい友達として育つて來たのである。いつしよに魚を釣つたこともあるし、柿の實を搦いだり、栗の果を拾つたり、水泳ぎもすれば、山登りもして遊んだ。でも、一度だつて口諍ひをしたこともなければ、況んや喧嘩などした覚えもない。全く兄弟のやうに仲がいいといふが、兄弟よりも仲のいい二人だつた。

その仲のいい二人の中の一人が、召集されて行くのである。明日の朝は早いし、召集令狀が來てから今まで、たつた二人だけで、べつに改まつて話したこともない。明日の朝は、六時の汽車に、乗らなければならない。今宵の今、この機會に話をしなければ、二人で話す機會など、もう永久になさ／＼な氣がする。

それならこそ敬作は、散歩するなど、いふ口實の下に、わざ／＼順吉の後を追つかけるやうにして、家を出て來たのであらう。——二人とも、話したいことが胸にいつばいあるやうな氣がするし、早く話さなければならぬと思ひ、話さうと氣が焦りながら、さて、何から、

どんな工合に話し出したらいいか、言葉が口から出ないのが、お互ひに替かしく、じりじりした。

「今更、言ふまでもないことだが、とし子さん初め君には、いろ／＼お世話になつたが、僕は、いよく行かなければならない。——行く前に僕は改めて君に、おねがひしておかなければならないことがあるんだ。」

敬作は、不斷から無口で、口数が少ない方だつた。その彼が吃々として力をこめて言つた。

「今更、改まつておねがひだなんて、どんなことだらう？ 僕に出来ることなら、何んでもする決心だが……」

順吉は、本當に心のまゝを口に出した。

「ありがたう！」

敬作は、友の前に、わざ／＼頭を下げるとうそれは、両親のことなのだ。母は、あんな病

身のことだし、父は何といつても年を取つてゐるし、僕がゐるない後は野良仕事の方も、どうなるだらう？ と思ふと、實のところの二三日、夜も眠れなくらく、心配になるんだ。——心配したつて、どうなることではないけれども。」

と、言つた。

「分つてゐる！ 君の氣持は、よく分つてゐる。」

順吉は、何遍も頷いたが、

「だが、さつきも君のお父さんや、お母さんにも話したことだが、そのことは決して心配しないやうに。國家のために應召する君の留守のことだもの、君の家の田や畑に、若し草一本でも生やすやうなことがあつたら、それこそ村全體の恥だからな。それに僕だつて、とし子だつて、自分の身がどうにかなる限りは、君の家のことを、放つてはおかないよ。自分の家のこと、同じやうに、きつとちやんとして行くから！ その點は君にも、安心して行つてもらひたいんだ。約束するよ。」

誓ふやうに言つたと思ふと、その誓ひのしるしであらう。順吉の手は敬作の手を探つて、固く握りしめてゐた。

「ありがたう／＼、よく言つてくれた。君にさう言つて受合つてもらへば、僕としても、こんな安心なことはない。——母はあゝして眼が見えない上に、持病があるんでね。餘計心配なんだ。きつと、とし子さんには、何かと一倍、厄介をかけなければならぬと思ふんだ。」
「心配しない方がいいよ。とし子はきつと、君のお母さんのことだもの。どんなお世話だつて、よろこんで引受けるよ。そして、君が手柄を立て、無事に凱旋する日を、待つてゐると思ふ。」

「凱旋するなんて、僕は夢にもそんなことは、望んでゐないが……國家のために捧げた生命だからね。生きて歸らうなど、は思つてゐない。としさんだつて、いつまでも家にゐられる身ではないのだし、その中にはお嫁に行かなければならぬだらうが、そしてそれは、いつのことか分らないけれども、とにかくそれまでは、母のことを宜しく頼むと、傳へてく

れたまへ。まさかお嫁に行つてからまで、僕の母の面倒を見てもらふわけには、いかないだらうからね。はは、ハ、ハ、ハ。」

と、敬作は笑つたが、その笑ひ聲は空洞のやうにひびいた。

「君は、そんなことを言ふけれども、おそらくとし子のヤツは、嫁になんか行かないだらうと思ふ。」

なぜか順吉は、かなしさうに言つて、ほつと太息を吐いた。

「どうして？」

敬作が、眼を見張つて、意外さうに聞くと、順吉は何か言ひたさうにして、しばらく考へてゐたが、

「そのわけは、僕には、今言へないけれども……いづれそのうち、君にも分る時が来ると思ふ。」

謎のやうなことを言つて、そのまゝ口を噤んだ。

いつの間にか二人は、順吉の家の前に來てゐた。

千人針

敬作が、順吉に別れを告げて、自分の家の門口まで歸つて來ると、その小流れに架つてゐる橋の畔に、一本の大きな榎の木が、すく／＼と生へてゐるが、その木の下に、ひとりの女が、しよんぼりと立つてゐる姿が見えた。——朧の月あかりに透かして見ると、それはどうやら、さつき歸つて行つたはずのとし子らしい。

つか／＼と近づいてゆくと、敬作は、

「とし子さん。——としさんぢやないか……」

と、聲をかけた。すると、それまで人が近づいて來たのにも氣が附かず、ぼんやり佇んでゐたとし子は、不意に自分の名を呼ばれたので、びつくりすると、

「え？」と、愕えたやうな眼をして、チラと振り返つたが、その顔は夜眼にも、夕顔の花のやうに蒼白かつた。

「としさんは、さつき歸つたんぢやなかつたの？」

敬作は、何氣なく言つて近づくと、とし子の顔を覗いた。

「え。」

「どうしたんです？」

「わたし、あなたに、ちよつと用事があつたものですから。」

言ひにくさうに、しばらくためらつてゐてから、思ひ切つて言つた。

「僕に用事つて……いつたい、どんなことでせう？」

「わたし……」

と言ひながらとし子は、ふところを探つてゐるが、

「これを……あなたに、差上げたいと思つて。」

と、紙に包んだ小さな、薄いものを取出して、敬作の前におづ／＼と、差し出した。

「僕に、くれるんですか？」

「え。」

「としさんがくれる物なら、僕は喜んで貰ふけれども——いつたいこれは、何んですか？」

「千人針。」

「え？」

こんな田舎の小さな村で、千人針を拵えるなんて、容易のことではないので、敬作はびつくりした。

「これを拵えるために、わたしは三日間、町に出て行つたの。敬作さんに貰つてほしいと思つて、一生懸命になつて拵えたの。」

「さうですか！」

敬作は思はず深い息を吐いて言ふと、その千人針を押し戴いてゐた。

「としさんの厚い志を、よろこんで頂きます。」

「貰つて下さる？」

「明日、僕は早速、これを肌身に附けて、出かけて行きますよ。——どこに行つても、これは僕の肌から、決して離すやうなことはありませんから！」

誓ふやうに言ふ男の力づよい言葉を聞くと、急にとし子の眼も顔も、ぱつとかゞやいたが、さも、うれしさうにニツコリと微笑すると、

「うれしいわ。」

と、かるく幸福さうな溜息を吐いた。そしてそのまゝ身を翻へして、逃げるやうにバタバタと、今度は自分の家の方に、駆け出してゐた。

敬作は、とし子から貰つた千人針を手にしたまゝ、彼女が歸つて行つた方の腕ろの薄闇の中を、しばらくじつと見送つてゐた。ぢきに姿は見えなくなつたが、それでも草履の足音が、ハタ／＼とかすかにだん／＼遠ざかつて聞えてゐる。それも間もなく、小流れの水のせせらぎの音にまぎれて、やがて聞えなくなつてしまつたが、でも敬作は、じつとそこに立ち、

すくんだまゝ、うごかうとはしなかつた。

さつきの順吉の謎のやうな言葉といひ、今またとし子の解せない態度といひ、敬作には何が何だかさつぱり分らなかつた。——わざ／＼千人針を拵えてくれたといふとし子の深切と、真心とが分らないわけではない。が、どうしてあんな工合に、何か秘密のこともでもするやうに、こつそり渡さなければならなかつたのか、その理由が分らなかつた。何もあんな工合にして渡さなくても、今までに渡してくれる機會は、何度でもあつたと思ふのに、それを一旦、歸つて行つたと思はせておいて、その實、こんなところに立つてゐたりして、どうもをかしいと思つた。

それはとにかく、とし子の深切だけは、うれしいと思つた。うれしいと思ふにつけても、これが千代子から貰つたのなら、更にどれだけうれしいか。おそろく十倍も、百倍も、もつとうれしいに違ひない。でも、千代子はゐらないのだ。——自分の應召のことも知らずに今ごろは、どこにゐることか。

(本當なら今頃は、二人は結婚して、もう一人ぐらゐるは子供が、生れてゐるところかも知れないのに。)

と思ふと、敬作の身内の血は、熱く燃え立つて來た。

二人は、もうやがて、結婚をするといふ日を眼の前に控えた三年前に、千代子は突然、ゐなくなつてしまつた。どういふ理由から家出をしたのか？ それは全く謎の行動で、敬作にも、誰にもわからない。

でも、敬作は、何のために家出したのか、その理由も分らなければ、再び歸ることがあるのかどうか、それすらも分らない千代子を、やつぱり忘れることが出来なかつた。來る日も來る日も今までたう／＼三年の月日を、空しく待ち暮らしてしまつた。今だつてまだ、決して絶望してゐるわけではない。

斯うしてゐる今でも、それ、そこまで歸つて來てゐるやうな氣がして、敬作は胸を躍らせ、町につゞく道の方を、つい振り返らずにはゐられない——

没落した家

桂田の家は、百姓こそしてゐるけれども、この村での田緒正しい舊家でもあつたし、吾助の父（敬作のためには、義理の祖父に當る）の代までは、村一番の大地主でもあつた。山林や、田畑など澤山所有して、自分で鋤鎌を持つて野良に出て、汗水流して働かねばならぬといふやうな、そんな身分ではなかつたのである。

それを、その吾助の父といふ人が、こんな田舎で眞面目な生活をするには、不似合な人物だつた。この地方では初めての東京の大學まで出て、この村には餘り居つかなかつた。多くは町で暮らして、會社を創立するとか、鑛山に手を出すとか、終ひには政治運動に熱中して、四十代でポツクリと、腦溢血のために死んでしまつた。

その時には家屋敷は勿論のこと、山林も田畑も、すべてを失つてゐた。そんな父親に似合はず、極く質朴で、律義な性質の吾助は、ちやうど父が亡くなつた時は、お房を嫁に貰つ

て、まだ一年も経つてゐなかつたが、借金の整理をして、すこしばかり残つた今のところに小さな家を建て、そこに引き移つた。

病氣勝ちの母が、一人残つたが、兄弟は一人もなかつた。

お房と二人で、せつせと働いた。三年ばかりして、また母が亡くなつた。吾助も、お房も、餘り頑丈な方ではなかつた。いくら一生懸命に働いても、父が失つてしまつた先祖からの財産を、取返せるはずはなかつた。どうか夫婦が食つてゆくだけが、やうやくのことだつた。

夫婦とら、餘り丈夫ではないせむか、二人の間には子供が生れなかつた。三年経つても、五年経つても、どうも子供を授かりさうな徴候が見えない。

六年目に、縁あつて一人の乳のみ兒を貰つた。それが敬作である。敬作は、町の娘さんのお腹に産れた、不幸な兒だつた。本當の父と母との手で、育てることの出来ないやうな事情と、境遇の下に生れて來たのである。だから生れ落ちるのを待ち受けるやうにして、手許に

引取つて来た。不自由な生活の中から、人工營養で育てた。

世の中には、實に不思議なことがあるもので、敬作が五歳の時に、お房が、女の子を産んだ。結婚して十年ぶりに、初めて子供が生れたのだ。——もう子供なんか生れるはずがないと、すっかり諦め切つてゐたのが、思ひがけもなく妊娠して、女の子が生れて来た。

夫婦は、さながら夢のやうな氣がした。でも、自分たちに實の子供が生れたからといふので、養子の敬作を疎んずるといふやうなことはなかつた。そんな性質の夫婦ではなかつた。それどころか、養子は男の子だし、産れて来たのは女の子だし、年も丁度五つちがひである。——大きくなつたら夫婦にして、自分たちの老後の面倒を見てもらふと、早くからそんな考へで、二人の子供を甲乙なしに大事にもしたし、可愛がりもして、育て、来たのである。

二人の子供が、だん／＼年頃になつて、物ごろが附いて来るに従つて、吾助夫婦のこの氣持は、自然と通じた。ハツキリそれと言はれなくとも、もちろん二人とも拒むはずはない。

い。

かへつて清らかな氣持ちで、好き合つた二人は、早くさうなることを待ち望んでゐるやうにすら、親たちの眼には見えた。敬作と千代子とは、兄妹として仲がいいばかりではなく、やがては夫婦としていつしよになる身として、お互ひに愛し合つてゐるやうにも見えたのである。

吾助もお房も、その様子を見て、どんなに喜び、どんなに幸福を感じたことか知れなかつた。

それなのに、今から三年前に、千代子は突然、家出してしまつた。べつに書き置きのやうなものも、残してはなかつたので、どういふ理由で、家出しなければならなかつたのか、さつぱり分らなかつた。敬作も、いくら千代子の氣持を考へて見ても、家出の理由など分るはずがなかつた。原因を、あれこれと尋ねて見ても、そんな原因など、どうしても思ひ當らない。

敬作は、呆然としてしまつたが、しかし、千代子にたいする愛情だけは、どうしても忘れることが出来なかつた。今にも歸つて来るか、それとも何とか便りがあるかと、それを待ちながら、つい／＼いつの間にか、三年といふ月日が過ぎてしまつた。

——そして、計らずも今度の應召といふことになつた。

千代子歸る

敬作は、いろんなことに考へ耽りながら、しばらく榎の木の下にぼんやり立つてゐるが、やがて小流れに架つた小さな土橋を渡り、家の前の広い庭を突つ切つて、戸口に近づいた。すると不意に、家の中から吾助の唳鳴つてゐる聲が聞えた。

敬作は、ハツとして立ち留つた。

(何事だらう！)

と、不思議な氣がしたのである。今、家には夫婦二人切りしかるるはずはないのだが、有

名な仲のいい夫婦で、今まで二人の間で、荒い言葉を一つ、言ひ合つたこともないことは、誰よりも敬作が、一番よく知つてゐるところだ。

また、律儀な上に、極めて温順な性質の吾助は、今までに人に向つて、聲を荒げたやうなことも、一度だつてなかつたことだ。——それをこの夜更けに、いつたい誰にたいして、何のために、こんな戸外までも聞えて来るやうな、大きな聲などして、唳鳴つてゐるのだろうか？ と、まつたく意外でもあれば、不思議でもあつた。

一旦、敬作は立ち留つたけれども、また、しづかに歩いて戸口に近づいて行つた。——つづいて何事が起るだらうと、不安な氣がして、全身の神経を、耳だけに集めるやうにしながら。

「……………」

何かポソ／＼と、女の聲のやうなものが聞えたやうに思つたが、それが誰の聲で、何と言つたか、そんなことは聞きわけられなかつた。

「今時分になつて、何の面目があつて、よくさうして、オメ／＼と歸つて來られたものだ！」
憤激し切つた氣持を、努めて抑へるやうにしてゐるらしい。吾助の聲は、さつきよりは、
いくらか柔らいだといふよりも、少し低かつた。

「お父つさんや。まあ、さう一概に言はないで……よく／＼困つたればこそ、斯うして歸り
にくいところを、押して歸つて來たんでせうから……今夜のところは、どうぞ一つ、かんべ
んしてやつて下さいよ。」

おろ／＼したやうな、低い聲でつぶやいてゐるのは、たしかにお房の聲に、ちがひなかつ
た。

「お前が、そんなことを言ふから、イケない。——そんな甘いことを言ふから、娘の方で、
どこまでも附け上ることになるのだ。」

「だつて、お父つさん……」

「いいから、お前は口を出さないで、黙つてゐてくれ。」

吾助と、お房との間の、口喧嘩のやうな工合になつた。

「だつて、黙つてはゐられないぢやありませんか。」

「まだ、黙らんのか。」

「自分の娘が、三年ぶりで、斯うして歸つて來たといふのに、一夜の宿もしてやらないで、
このまゝ追ひ返してしまふのは、あんまりです。」

「何が、あんまりだ。」

「それでは、この娘が、可哀さうぢやありませんか。」

「可哀さうなことがあるものか。自業自得といふものだ。」

「まあ、お父つさんは、そんな氣の強いことばかり言つて……千代子も、よく謝りなさい。
い。そしてお父つさんも、いい加減で、どうぞ許してやつて下さい。——敬作だつて、斯う
して千代子が歸つて來たことを知つたら、どんなに喜ぶかおしれないと思ひます。」

「わしは、千代子が斯うして歸つて來たことを、敬作が喜ぶなどは、決して思へないの

だ。」

「何んですつて？ それでは、あなたには敬作の氣持が、ちつとも分つちやらないんです。」

「イヤ、わたしにはあの子の氣持が、よく分つてゐる。」

「敬作の氣持が、すこしでも分つてゐたら、斯うして歸つて來た千代子を、喜んで迎へてやるのが、本當ですよ。」

「馬鹿なことを言ふな。」

と、吾助は頭から一言の下に、叱りつけた。

「馬鹿なことではありませんよ。」

お房も、サカ／＼負けてはゐなかつた。——不斷はどんなことでも、良人にたいして口答へなどしたことはないお房だつたが、娘のためには、黙つてはゐられなかつたのだ。

義理と情

敬作は、さつきから入るには入れず、戸口に佇ずんだまゝ、聞くともなしに中の話し聲を聞いてゐた。戸が細目に開いてゐるので、そこから内部の様子が、よく見えるのであつた。

お房は、出かける時のまゝに、納戸に寢床を敷いて、寢てゐるし、吾助は上櫃の近くまで出て來てゐる。そして、土間に佇ずんで、あまり口もきかずに俯垂れてゐるのは、千代子ではないか。全く、今、そんなところに千代子の姿を見出すなんて、夢のやうなことだつた。

さつきまでも、

（斯うしてゐる中にも、或ひは千代子は、そこまで歸つて來てゐるかも知れない。）などとは思つたけれども、それがまさか、本當にこゝに歸つて來てゐるやうとは！ 何だか夢のやうな氣がして、しばらくの間は、本當のやうな氣がしなかつた。

千代子の姿は、すっかり都會風に變つて、美しくなつてゐた。しかし、どこか身體でもわるくしてゐるのか。敬作の立つてゐる位置から見える横顔や、襟脚や、肩のあたりなど、この村で暮らしてゐた時とは、まるで見ちがへるやうに細々として、憔悴れて、いかにも哀れ

げだった。灯影を受けてゐる顔の半面が、灰白く、まるで夕顔の花のやうに見えるのは、粉のせるばかりとも思へなかつた。しよんぼりと土間に佇んで、父と母との會話に耳を傾けてゐる中にも、幾度か苦しうに咳き入つて、ハンカチーフで口元を抑へるのであつた。

(風邪でも引いてゐるのだらうか?)

と思つて敬作は、その姿を見ただけでも、胸が絞られるやうに、何だか切なくなつて來るのであつた。

(可哀さうに!)

すぐにも飛び込んで、出來るだけ働つてやりたいと思つたが、敬作にはそれが出來なかつた。

血肉を分けた眞實の妹でないために、両親の手前も、何か遠慮しなければならぬやうな、氣兼ねがあつた。——それに肝腎の父が怒つて、許さないなど、息巻いてゐるものを、敬作がいかにも懐かしいと思つたところで、この場にいきなり飛び込んで行つて、喜んで迎へ

てやるといふわけには、いかなかつた。

やつぱり、第一には父の氣持を、尊重しなければならぬ。

そんなわけで敬作は、すぐにはその場に、飛び込んで行くわけにもいかなかつたし、戸口に佇すんだまゝ、氣を揉みながら、中の様子を窺つてゐるよりほかなかつた。

早く、父が許してやつて、座敷に上げてやつてくれればいいのに! と、焦りくした氣持で、祈りながら。だが、吾助は、ナカ／＼許してやるやうな氣色も、見えなかつた。

いつまでも、お房の相手になつてゐるところが、仕方がないと思つたのだらう。きつとなつて、千代子の方に向き直ると、きつぱりと、

「おつ母さんは、あんなことを言つてゐるけれども、わしとしては、このまゝお前を許して、たとへ一夜の宿でも貸してやるわけには、いかないのだ。このことはお前だつて、よく考へて見たら、わかるはずぢやないかと思ふ。」

でも、穩かに、嚙んで含めるやうに言つた。

「……………」

だが、千代子は、相變らず俯垂れたまゝ、黙つてゐた。

「さうぢやないか？ お前は、何んと思つて、今頃歸つて来たか知らないけれども、おつ母さんは、あの通りの不自由な身體だし、わしだつてお前が知つてゐる通りに、丈夫な方ではない。」

千代子は、父が何のために、わざ／＼そんなことを言ふのだらう？ といふやうに、わづかに顔を擡げると、不思議さうにその顔を見上げた。

「だから、わしは怠けるわけではないが、どうも一人前の仕事は出来なのだ。お前が家を出してゐなくなつてしまつた後、たゞ一人で、一生懸命に働いて、一家の生活の心棒になつて支へて来たのは、皆な敬作一人の力だ。感心な男で、愚痴一つ言ふではない。お前の向ふ見ずな振舞ひにたいしても、心ではどう思つてゐるか知らないが、口に出しては怒つたこともなければ、不平を一度言つたこともない。」

「……………」

千代子は何と思つたか、また俯垂れてしまつた。父の言葉にじつと聞き入つて、傷々しく瘦せた肩先を、かすかに慄はせてゐるだけだつた。

吾助は、老ひの眼をしよぼ／＼させて、憐れ氣な娘の姿が、ほのかな灯影にぼんやり浮んでゐるのを、じつと見入りながら、聲を慄はせて、

「だが、敬作が、いかに物のよく分つた、溫和しい人間だからといつて、彼男の氣持も考へずに、お前が歸つて来たからといつて、おいそれと、すぐに許すわけにはいかないのだ。」と、言つた。

「……………」

「どうだ？ その義理が、お前にも分らないことはないだらうと思ふが、どうだ？」
吾助の聲は、最初とは違つて、全くやさしかつた。

「えゝ。分りましたわ。」

千代子は、蒼白い顔を擡げて、かなしさうに言つた。

「義理ほど、辛いものはないからな。」

吾助の聲も、涙に曇つて、かすかに慄へてゐる。

「え。」

「義理ほど辛いものはないが、しかし人間として、また、義理ほど忘れてはならぬものはないのだ。」

「え。」

「どんなに辛くても、義理は大事にしなければならぬし、また義理には従はなければならぬ。」

「え。よくわかりましたわ、お父つさん……」

「わかつてくれたか。」

「え。」

千代子は、きつぱりと頷いて、父と母とを交々見て、

「わたしが歸つて來たのが間違つてゐたのです。では、お父つさんもお母さんも、身體を大事にして下さい。わたしはこれで行きますから。」

と言ふと、千代子は思ひ切りよく、裏口から出て行く。

裏口からつゞいてゐる裏道は、こゝからステーションや、町に出て行くのに、かなり近道だつた。

敬作が氣が附かない中に、千代子が歸つて來てゐたのは、きつと、この裏口の近道から歸つて來たのだらう。

夢遊病者の如く

「千代子々々々」

寢床の中から、咽び泣いてゐるやうなお房の聲が、かなし氣にひびいてゐる。父は、圍爐

裡の傍に坐つて、腕ぐみをして、固く眼を閉ぢてゐる。

千代子は、裏口のところで、一步敷居を跨がうとして、さすがに後髪でも引かれるやうな氣がしたのだらう。立ちすくむとチラと振り返つたが、すぐに思ひ返したやうに、さつと裏口から、外の闇の中に消えてしまつた。

(千代ちゃん！)

敬作はアツと思つて、心の中で、小さい時から呼び馴れた通りの言葉で叫ぶと、そのまゝ、家の中に飛び込んで、引き留めやうと思つた。が、すぐに思ひ返した。——そつと裏を廻つて行くと、敬作は千代子の行衛をたしかめやうとして、裏口からつゞいてゐる道の行手を、じつと見た。

空は薄ぐもりがして、相變ずかさのかゝつた月が、山の端に沈まふとしてゐるところだつたが、それでも朧ろの月明りに、かなり先の方まで、見透しが利くのであつた。

——ちやうど十二三間も向ふに、千代子の姿が、しょんぼりと見えた。じつと立ち留つて

ゐるやうでもあるし、また、歩いてゐるやうでもある。月明りの遠見なので、よくは分らなかつた。

敬作は、しばらくそこに佇んで、迷つてゐた。

追つかけて行つて、引き留めたい！ といふ氣持は山々だが、しかし、たうとう父に許されないうで、追ひ返されて行くものを、自分が追つかけて引留めたりするのは、何だかわるいやうな氣がした。氣の弱い敬作としては、思ひ切つて、そんなことも出来ないであつた。

とつおいつ、しばらく迷つた果、たうとう思ひ切つたのだらう。千代子の後を追つかけた。——追つかけずにはゐられなかつたのである。引き留めるか、留めないかは第二として今、會つて話しておかなければ、一生涯會つて、口をきく機會などは、もうないやうな氣がした。

十五間ぐらゐるな道は、ほんの一飛びだつた。

「千代ちゃん」

敬作は、千代子の後から呼びかけたが、どうしても胸が慄へ、聲まで慄へるのを、自分でも落着けることが出来なかつた。口の中がから／＼に乾からびて、水をいつばい欲しいと思つた。

「えー」

千代子は、立ち留つてゐたのではなかつた。ステーションのある町の方に向いて、とぼとぼと力なく歩いてゐたのである。——自分では、どこに行かうといふことを、ハッキリ決めないで、當てもなく歩いてゐる夢遊病者のやうに、たゞフラ／＼と顔の向いた方に、歩いてゐるといふ都合だつた。それが、不意に自分の名を呼ばれたので、びつくりしたやうに立ち留まると、振り向いた。ほのかに匂ふやうな白い顔が、敬作の眼の前に近々と浮んだ。

「千代ちゃん……よく、ほんとによく、歸つて来たね。」

敬作は、うれしさに胸を躍らせ、呼吸を弾ませて言つたが、言葉は吃るし、脇の下には冷汗をにじませ、臉にはかすかに涙が浮んでゐた。

「あら！ 敬作さん。」

全く、思ひがけなかつたらしい。千代子はさけぶと、その華奢な身體が、よろ／＼と揺れて、危ふくその田圃の中に倒れやうとした。

敬作は、素早く、

「千代ちゃん」

と叫ぶと、両方の腕を延ばして、しつかりと抱き留めてゐた。

「……………」

千代子は、何にも言はずに、ひいと敬作に取すがつて、その胸に顔を埋めるやうにして、全身をわな／＼かして、はげしく咽び泣いてゐた。

二人の娘

田舎町の小さなステーション前の廣場は、大勢の人々で、ごつた返した。——敬作のほか

に、同じ驛から、同じ列車で應召して行く兵隊さんが、六人もあつたのだ。それ／＼各自の家々の前で、親類や、村の人々や、町内の人たちが集つて勇ましく別れを告げたり、萬歳を三唱したりして出發して、來たのであつたが、改めて驛前の廣場で、七人の應召者をいつしよにして、簡単な歡送の式が行はれた。

七人の應召者の見送り人たちが、皆ないつしよになつた。それに町の愛國婦人會や、國防婦人會の人たち、青年會や、處女會の人たち、在郷軍人や、町長さんや村長さんや、役場の人々や、校長さんや、小學校の生徒や、町村會の議員や、町や村の名譽職の地位にゐる人々は、皆な總出だつた。

それ等の人たちが、七人の應召者を中心にして、皆な驛前の廣場に集つたのだ。——この町に鐵道が敷かれ、ステーションが設けられてから實に空前の人出と言つてよかつた。

皇居遙拜、國歌合唱、町長さんや、校長さんたちの激勵の辭。それから豫備陸軍砲兵中佐の訓辭などいろ／＼あつて、七人の應召者は元より、大勢の見送人たちまで、まことに涙ぐ

ましい感激を覺えない者は、一人もなかつた。

次ぎに應召者が一人々々と立つて、簡単な答辭を述べた。皆な勇氣と、感激とに張り切つてゐた。生命を鴻毛の輕きに比し、一死君國のために報ずる覺悟を、誰ち／＼力づよい言葉を以て、固く／＼誓つた。實に頼もしい限りだつた。

五番目に、司會者の在郷軍人會長から、凛々とひゞく聲で、
「陸軍歩兵上等兵、木村敬作君。」

と呼ばれて、應召者と書いた赤い襷を肩から斜めに掛けて（氣を附け）の姿勢で、七人ずらりと並んだ列から離れ、しづかに、しつかりした歩みを運ぶと、準備されてゐた臺の上に乘つて、毅然として立つたのは、敬作だつた。

見送りに來てゐる父の吾助は、さつきから、もう胸をわく／＼させてゐたが、更にまた、この晴れがましい息子の姿を斯うして眼のあたりに見ると、胸が迫つて、喉に熱い涙がにじんで來た。

(まあ。)

兄の順吉といつしよに、やつぱり今朝、ステエションまで敬作の見送りに来たとし子も、大勢の人々の間から延び上るやうにして、敬作の立派な姿を見ると、かすかに溜息を吐かずにはゐられなかつた。——どうかして、もつと氣を落着けやうとしても、胸は早鐘でも撞くやう！呼吸が弾んで、竝んで立つてゐる千代子の手を、思はず知らず力いっぱい握りしめてゐた。

——千代子は、昨夜あれから敬作が、家に連れて歸つた。父の吾助が固く、いつまでも愚圖々々言ふのを、敬作がいろいろ言葉盡して宥めたり、千代子に代つて謝つたりしたので、その上吾助も、頑固なことを言ひ張るわけにはいかなかつた。たうとう許して座敷に上げると共に、今朝の敬作の晴れの應召を見送ることも、許してくれたのであつた。

だから千代子は、順吉やとし子を初め、ほかの人々とも精しい話をする暇もなかつたけれども、皆なといつしよに、ステエションまで見送りに、出て來てゐるのであつた。彼女は敬

作と順吉と、兄同志が親しいと同じやうに、とし子と小さい時から、とても親しかつた。——二人はお互ひに、その後の精しいことなど話し合つたりする暇もなかつたけれども、家を出かけてゐる時から斯うしてずつといつしよに離れずゐるのであつた。

臺の上に立つた敬作の姿を見ると同時に、とし子の顔がホッ！上氣したやうに仄かに振らんだ。そして、はげしく呼吸を喘がせると共に、思はずとし子の手に力が入つて、千代子の手を痛いほど、ぐつと握りしめたことに、千代子は勿論、素早く氣が附いてゐた。——とし子が興奮して、我を失つたやうな有様を見ると、千代子の胸は、緊めつけられるやうに痛んだ。千代子は、ほとんど衝動的に、取られてゐる手を振り離さうとしたが、やつとこのことで、齒を喰ひしぼるやうにして我慢した。

千代子は、しつかりとし子に、わが手を掴まれたまゝ、ほとんど夢うつゝのやうな氣持で、凛々しい敬作の姿を眺め、すしし吃り氣味に、朴訥な調子で何か言つてゐるのを、聞いてゐた。

敬作も、ほかの人たちと同じやうに、もう今日からの自分の生命は、君のために捧げたもので、自分のものとは思つてゐないといふことを言つた。こんな立派な歡送の式をしてもらひ、斯くも澤山の人々に見送られて、家の面目身の名譽、いかなる言葉を以て感謝したらいいか、わからないとも言つた。たゞ、この上は、忠勇な一人の兵隊として、立派な働きをして、君國のために盡くことが、皆さんの熱誠なるこの御厚意にたいしても、報ひ得る唯一の道でもあると、さうも言つて感謝した。

「誰の覺悟も同じことだと思ひますが、私もまた、生きて再び祖國に見え、生きてこの故郷の土を踏まうとは思ひません。——どうぞ、後のことは宜しくおねがひいたします。年を取つた兩親と、そして、たつた一人の妹とを、殘して行くのですから。」

最後の聲は、いくらかうるんだやうに聞えたが、それでもいかにも軍人らしく、取亂したやうなところなどみぢんも見せなかつた。

言ひ終ると固く唇を結んで、ていねいに頭を下げた。——そして、臺を下りると、ま

だ、さつきと同じやうに元氣な足どりで元の列に歸つてゆく。

とし子は、燃えるやうな眼をして、じつと息を呑むやうにして、また、きもせず、敬作の姿を追ふてゐた。——その手は、やつぱり千代子の手を、力いっぱい握りしめたまゝで。

千代子は、敬作の方を見るよりも、竝んでゐるとし子の方が、どうも氣になつて仕方がなかつた。だからやゝもすると敬作の方から眼を離して、とし子の上にチラ、チラと、そゞぐのであつた。

歡呼の聲

「萬歲々々。」

と、叫ぶ聲。

「歡呼の聲に送られて

今ぞ出でたつ父母の國

勝たずば生きて歸らじと

誓ふこゝろの勇ましき」

と、歌ふ聲々。

その賑やかな聲は、上屋のないプラットホームから、澄み切つた蒼空にとひゞき、はるか向ふにうね／＼と蜿つてゐる浅い山脈にこだまし、見送る人々の胸にも、見送らるゝ者の胸にも、感激の波を掻き立て、忠誠の血を湧き立たせ、愛國の焰を燃え立たせるのであつた。

無数の小旗はひらめく。列車の窓から顔が覗く。

「では、元氣で——」

「しつかり頼むぞ。」

「後のことは、心配するな。」

親や、兄弟や、親戚や、隣り近所の人々だらう。列車の窓々にすがり附くやうにして、口

口に言へば、

「では、行つて來ます。」

「一生懸命やりますから。」

「力いつぱいやつて來ます。」

など、今更のやうに眉宇を上げるやうにして、頼もしく誓ふ。

「萬歳。」

「萬歳々々。」

汽笛が鳴つて、列車が徐々にうごき出すと、またしてもはじけるやうな萬歳のさけび聲。プラットホームを埋めつくしてゐる人々のどよめき。手に／＼力かぎり打ち振つてゐる小さな日章旗の波と、渦巻き！

「敬作さん！」

とし子は、汽車が動き出すと、もう我慢が出来なかつた。これ切り永遠の別離になるかも

知れないのだと思ふと、一尺二尺と、離れて行く敬作の顔を、たゞ見送つてゐるだけではどうしても我慢が出来なかつた。——人前も忘れたやうに叫ぶと、よろ／＼と、遠ざかりゆく敬作の顔を追つかけた。

「危い。」

窘めるやうに低い聲でさげふと同時に、よろめくとし子の身體を、抱きとめてくれたのは、兄の順吉だつた。

「兄さん！ 家のことは、決して心配しないでね！」

千代子は、涙にぬれた眼で見送りながら、こゝろから殊勝に言つた。

「頼んだぞ！ お父つさんも、お母さんも、大事に……」

敬作は、窓から身を乗り出すやうにして言つたが、既にその時には、大分距離が出来てゐたし、車輪のひゞきに半ば掻き消されて、ハッキリとは聞えなかつた。やうやくその唇のうごき工合に依つて、半分は察しただけだつた。

「大丈夫だよ。だから、お前は、しつかりやつて来てくれ。」

吾助は、敬作の顔なんか既に遠くへ去つてしまつたのに、まだ、そんなことを叫んでゐた。

「萬歳々々。」

「萬歳。」

列車は、プラットフォームから、離れてしまつてゐた。それだに、人々の熱狂した聲々は、しばらくの間大空にとゞろき、渦巻き返つてゐた。

「さあ、父つさん……それでは、歸ることにしませう。」

もう先刻から人々は、ぞろ／＼と歸り初めてゐた。——汽車も遠く去り、山脈の裾を折れ曲つて見えなくなつてしまつたばかりでなく、そのひゞきすら次第にかすかになつて、ついには聞えなくなつてゐた。

それでも吾助は、まだプラットフォームから動かうとはせず、じつと石のやうに立ちつく

してゐるので、順吉は言葉をかけると、吾助の手を取つてゐた。

ステーションから村まで歸るのには、乗合自動車だとか、電車などいふやうな、そんな氣のきいた乗り物もなかつた。タクシーか、人力車はあつたけれども、しかし、農家の人々が、そんなものを利用することなど、今まで例のないことだつた。

「歩いて歸るの？」

たとへ三年でも、都會生活をして來た千代子には、遠い田舎道を歩いて歸るといふことが、とても大儀なことに思はれた。タクシーに乗れば、三十分とはかゝらない時間で、歸れるだらう。

「歩いて歸らいで、どうするだ？ 自分の足があるのに。」

吾助は、ムキになつて、頭から叱りつけるやうに言つた。

「わたし、タクシーの代ぐらゐなら、奢つてもいいことよ。」

「何を贅澤なことを言ふのだ。」

「贅澤ぢやないと思ふわ。タクシーに乗れば第一、時間が經濟ぢやない。すぐに村まで歸れるわ。」

「千代子！」

「それから五人も、六人も乗れるぢやないの。——考へて見るとかへつて得ぢやないかと思ふわ。」

「千代子！ 自動車に乗るなんて、そんな大それたことは、百姓として考へることではないのだ。」

吾助は、怒るといふよりも、むしろかなしさうに言つた。

「でも、お父つさんは、疲れてゐるのでせう？」

千代子には、父の融通のきかない固くるしさが、齒がゆくもあれば、焦れつたくもあつた。

「わしは、どんなに草臥れてゐたつて、自動車などに、乗らうとは思はない。自分の足で歩